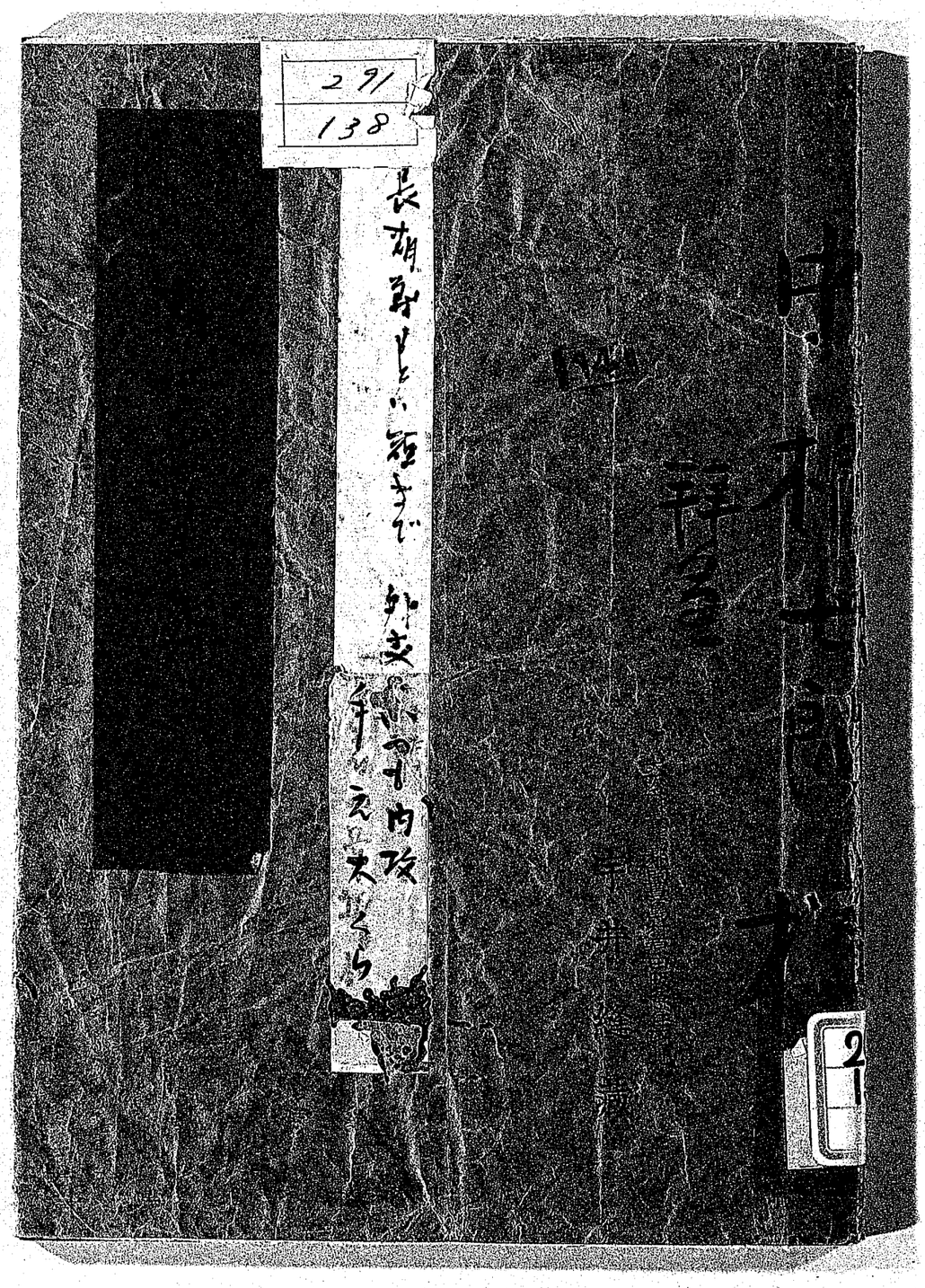


県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

291
138

中根文庫

141

拜呈

大阪府豊能郡南豊島村原田阪急住宅地

宇井縫藏

21

龍谷隨筆

南紀史叢考

長胡弟と云短きで外交ハ四十内攻手元大くら

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 04064

291
138

中根七郎様

拝呈

大阪府豊能郡南豊島村原田阪急住宅地
宇井縫藏

長期御見ハ確まで 外交ハ四ツ内政
千元大くら

龍谷
随筆 南紀史叢考

14

89 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04064 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9

291
138
1

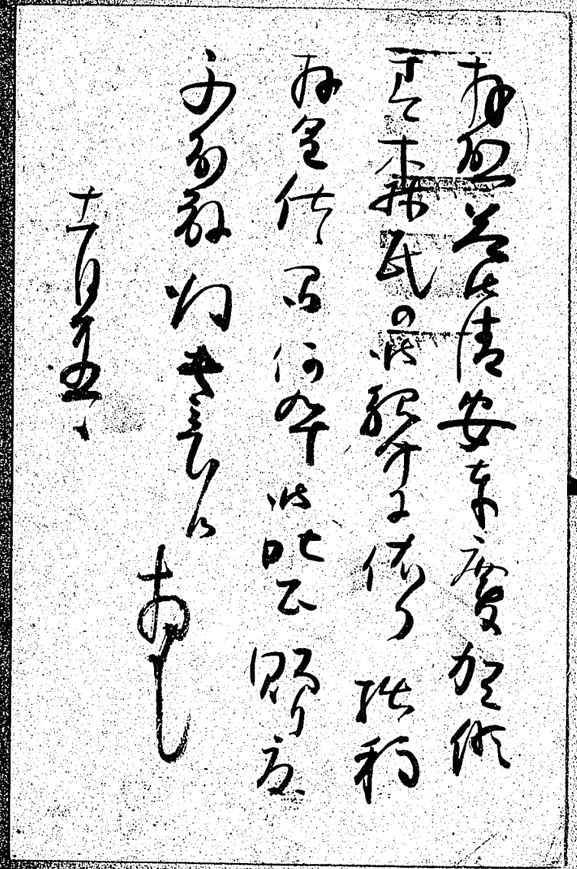
中根七郎氏寄贈

宇井縫殿介稿

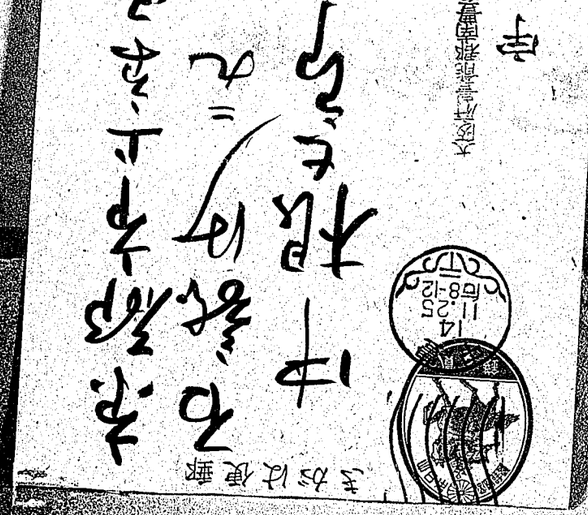
紀州藩南紀史叢考

古座高校図書館
28.11.21
蔵書NO. 4064

和歌山県立古座高等学校



県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064



291
138
1

中根七郎 氏寄贈

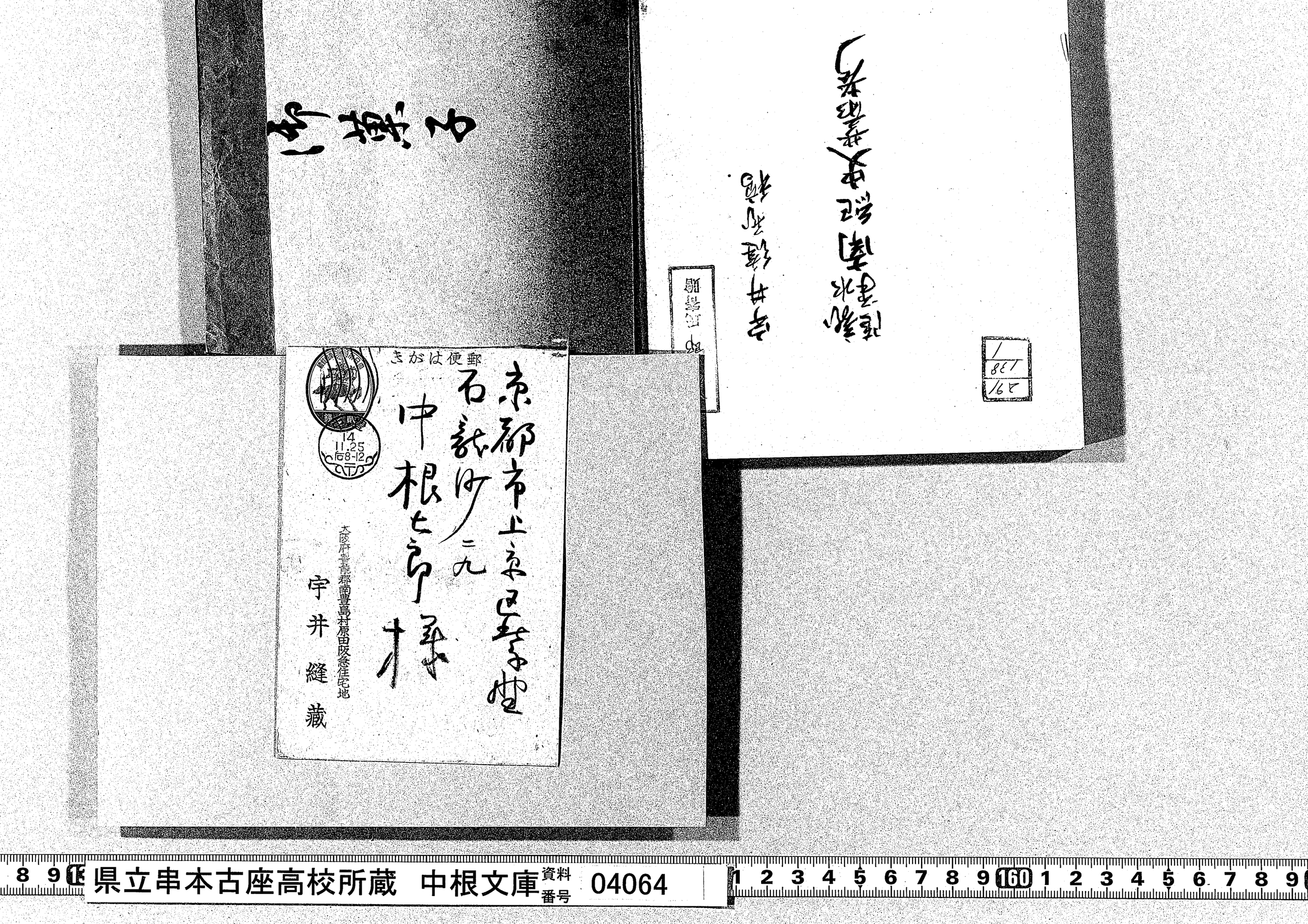
宇井縫所稿

龍水陸軍南紀史叢考

古座高校圖書館
28.10.21
藏書NO. 4064

和歌山縣立古座高等學校

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04064


郵便はがき
京都市上京区[illegible]
石[illegible]町二九
中根七郎様
14
11.25
伝8-12
大阪府豊能郡南豊島村原田阪急住宅地
宇井縫藏

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

はしがき

一久しく他郷に住んでゐても、やはり生れ故郷は忘じがたいものである。日々の新聞紙を見ても、とかく紀州に關する記事が私の心をひきつける。古本の即賣會などにいつても、何か紀州に關する珍らしい文献でもないかとさがす氣になる。

一史學は私の專門外であるが、どちらかといへば、私は若い時分から國史を讀むのが好きであつた。今までの私は博物なんていふ方面へ脇道してゐたといつてもよい。何年あるか知らないが今後の餘生をうらこんで、鄉土に關する歷史でも調べて見たい。

一この小冊子には、昨年夏ごろからいろ〳〵の書物を調べて、書きあげてみた紀州に關する史談と、ずつと以前にある雜誌へかいた御綱柏の一篇とを收めた。畠違ひの研究ゆゑ、定めて誤謬も多からうし、的外れの議論に走つた点も少くなからう。御叱正を乞ふ。

昭和十四年五月はじめ北攝曽根の寓居にて

宇井龍水識

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

目次

御綱柏……一
雨畠山氏と紀州……八
織田信長と紀州……二三
豊臣秀吉と紀州……三七
田邊地方に於ける天正兵亂の再檢討……五二
豊公南征に關する重要なる古文書……六一
杉若越後守……六四
湯川記を讀む……七三
佐久間信盛謫居の地……七八
大阪の役と紀州……八〇
あいまいなる人名……八四
參考史料について……八九
雨畠山氏・織田氏
豊臣氏關係 紀州年表……九三

南紀史叢考

御綱柏

一

御綱柏の名の文献にあらはれた最初は、いふまでもなく古事記であって、その高津宮中巻に、

「自此後時。爲將豊樂而。於採御綱柏。幸行木國之間。天皇。婚八田若郎女。於是大后。御綱柏積盈御船還幸之時。（中略）於是大后大恨怒。載其御船之御綱柏者。悉投棄於海。故號其地謂御津前也。」

とあり、また日本書紀の仁徳天皇紀に、

「三十年秋九月乙卯朔乙丑。皇后遊行紀國。到熊野岬。即取其處之御綱葉而還。於是日天皇伺皇后不在。而娶八田皇女。納於宮中。時皇后到難波、濟。聞天皇合八田皇女而大恨之。則其所採御綱葉。投於海而不着岸。故時人號散葉之海曰葉濟也。」

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

2 とある。これらの記録によると仁徳天皇の皇后が、豊明(トヨアカリ)し給はんがために、わざ〳〵浪速の都から紀伊國潮岬まで、御綱柏を採りに御越し遊ばされたといふのである。

古事記傳によれば、御綱とは三綱（君臣、父子、夫婦）の意であると書いてあり、皇大神宮儀式帳には御角柏(ミツノガシハ)、延喜式巻四十には三津野柏(ミツノガシハ)とし、また長柏(ナガガシハ)などゝも和歌によまれてゐる。

二

御綱柏を何に用ひられたかといふと、それは壬二集に、

萬代もなほ長月の空にあふみつの柏にみき奉る

とあるやうに、昔は神をまつられる時や、朝廷の御宴に供物や酒を盛るにはなくてはならぬものであつたらしく、また神事の占ひにも用ひられたといふ事は、續古今集の、

おもひあまりみつのがしはにとふ事の沈むにうくは涙なりけり

といふ和歌によつても知られる。

三

然らばこの御綱柏といふのは、果して何植物であるかといふ事については、古來多くの國學者や本草家によつて、いろ〳〵考究せられたやうで、異説が少くない。殊に紀州の生んだ徳川末期の偉大な博物學者畔田翠山翁の如きは、深く研究考證せられ、その著古名録や熊野物産初志などには、それについての多くの記事がある。

昔から御綱柏にあてられた植物は、大体五つある。

四

其一は、アカメガシハ（大戟科の植物）といふ説である。徳川時代や明治になつてからも、神宮でも諸國民間に於ても、神をまつられる時に御綱柏の代用として用ひられた事もあるやうで、現に私共の幼時にはこれを用ひられてゐるのを見た事もあり、紀州地方では、ゴシヤバ（御菜葉の轉訛ならん）とか、サイモリバ（菜盛葉の意）などいふ方言さへある。併し眞の御綱柏は常緑植物でなければならぬ事と、南方の暖地特産であるといふ條件が必要であるのに、アカメガシハといふのは、落葉樹であつて、何處にでも自生する普通植物であるから、御綱柏にあてる事は出來ない。

五

其二は、カクレミノ（五加科の植物）といふ説であつて、これも御綱柏の代用として用ひられ一時これを眞物と信じられた時代もあつたやうである、かの三角柏(ミツガシハ)といふ異名はカクレミノの葉の三裂せるところより來たものとも考へられる。畔田翠山翁が文政七年に内宮に問合された時、三角柏と認めてカクレミノの葉十枚差越せりと、古名録に書かれてあつて、これは全く眞の御綱柏を秘じてこの僞品を送れるならんと附記されてゐる。この植物は暖

3 地固有の常緑樹であるが、近畿地方では泉州あたりにも自生するもの故、わざ〳〵荒海を

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

十 お越えになつて紀州南端まで御採りに御出で遊ばされたとも想はれず、御綱柏にあてられない事は明かである。

六

其三は、マルバチシャノキ（紫草科の植物）といふ説である。今でも潮岬邊ではミツナガシハの方言をもつて呼ばれ、眞物と信じられてゐる。この説は可なり古い時代からのやうで、古名錄には、翠山翁が文政の末年紀伊侯の命を受けて熊野に到り、潮岬神社の神官に就いて尋ねられた時、御綱柏として示されたのはこの木であつたやうで、翠山翁はその木は質間本草の金連子でありとなし、その樹丈餘に至り大さ股の如しと記し、熊野物産初志には金連子（潮岬方言ミツナガシハ）とあつて、その記載と葉の寫生圖を載せてゐるが、それが正しく今いふ所のマルバチシャノキであつた事が判る。そしてその記事中に「此樹潮岬に限り生じ他地に無之を以て、御綱柏と好事者附會するものなり」と書かれてゐる。

また紀伊續風土記物産の部に、「今牟婁郡潮崎莊潮御埼にて御綱柏といふ者あり、高さ丈許、其葉大さ五寸許五尖にして、中尖大にして左右の四尖は小なり、周邊鋸齒ありて厚く莖葉共に濕毛あり、四五月の間五瓣小白花聚り開き後稜桐の如き實を結ぶ云々」とあるのは、葉形において聊か腑に落ちない点あるも、多分マルバチシャノキの事なるべく、同書にもこれは眞物にあらずとなし、「これは傳へ聞く元祿の頃京都の人此所に來り、初めにいへるものを見出し妄に三角柏に充てしより、土人却りて眞の三角柏をしらざるなり」辨別すべし」とあつて、同書には前記のカクレミノを眞物なりとしてゐる。併しカクレミノの御綱柏に充てがたき事は上述の通りであり、このマルバチシャノキを御綱柏とする事の非なるは、元來この樹は紀州に自生せるものではなく、德川時代ごろに臺灣あたりからの移入とも考へられる事で、現今紀州では僅に潮岬、串本、那智などに栽植せられてゐるに過ぎないのと、これが落葉樹であるといふ点からいつても、御綱柏にあてるわけにはゆかない。

七

其四は、ホウロクイチゴ（薔薇科の植物）といふ説で、これは畔田翠山翁の主張である。熊野物産初志には、カシハイチゴといふ處に、その形態を詳記せる後、「大邊路江住より潮岬に至るの間山谷に多し、日本書紀にいふ御綱柏と云此也」と記し、官川日記の三綱柏の圖といふを引證して、「夫木抄、三綱柏の註にも、かづらのやうにて生たるを登りて截おろすといへり、然則三綱柏は蔓草たる證にして、即ちカシハイチゴなる事明也」と斷定せられてゐる。こゝにカシハイチゴといふものは、その記載や挿圖から見てそれが今いふ所のホウロクイチゴの事であるのは明らかである。この植物は紀州にては田辺以南に自生し、殊に固參見より潮岬地方へかけて頗る多い常綠の植物であつて、かの艷やかな大きな葉をつけた蔓草の一面に繁茂せる樣を見れば、しか考へられぬ事もないし、實際この地方では、昔時神をまつる時の供物を盛るために用ひられた事もあつたと古老はいひ傳へてゐる。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

其五は、オホタニワタリ（羊歯類）といふ説である。これは白井光太郎博士の強調せられた最も新しい説で、昭和四年七月發行の植物研究雜誌上で「御綱柏とは何ぞや」と題して詳論せられてゐる。その論據とする所は、鴨長明が伊勢記にある、

「此國に三角柏と云物あり、小侍從が歌に、

神風や三角柏にとふ事の沈むにうくは涙なりけり

とよめり、これにて占ふ事ありにや、年ごろおぼつかなく思ふことを、此度人々に尋ぬれば、え聞及ばぬよしをのみいふ、いかなることにか、此柏、輔親卿、集に、みもすそ川の岸に生るとよみ侍るは、其わたりにあるかとて尋ぬれば、昔やありけむ、今の世には、志摩國の内にとくの嶋と云處にあり、木の上にかづらのやうにて生たるをのぼりてきりおろす時、ひらに伏して落たるをば取らず、竪（タテ）さまに落たるばかりをとる、其落ちやうにぞ問ふ事のありとかや云傳へたる、晃は神宮四度の御祭りの時必ず入る物なり、御前の御遊びはて、四の御門の脇にとくらのこと云おほみわを設く、社の つかさ、此三角柏を各一葉づゝ持てよれば、其上に此のみわをそゝぐ、ことさら晃を 腰にさして出るなり、長柏とも云にや、寂阿法師百首の歌の中に、

思ふ事とくの御嶋の長柏長くぞたのむ廣きめぐみを

と云り、かやうに聞けど未だ其すがたをば見ず、此の日或人の許より贈れり、柏のやうにて廣さ三四寸、長三尺ばかり、まことに常の木草の葉には似ず」

といへるを引き、幅三四寸長さ三尺許りの葉といへば、オホタニワタリの外にあるべからず、御綱柏は必然オホタニワタリに來すべしといはれてゐる。さすがに博士の如き達識の學者にあらざれば、オホタニワタリと氣付かれまいと敬服せざるを得ない。併し御綱柏のオホタニワタリであるといふ説に、直に首肯出來ない点は、白井博士の引用せられた伊勢記の同じ記事中に「木の上にかづらのやうに生たる云々」とある事である。オホタニワタリは紀南地方では地上岩壁などには生ずるも、九州五嶋や臺灣などにては樹上に着生する事もあるといふから、木の上にのぼりてきり落すといふ点は何等矛盾しないとしても、かづらのやうとあるのがいぶかしい。或人の許より贈り越せりといふものは多分オホタニワタリであつたであらうし、或時代には御綱柏の代用として使用せられたといふのも、長柏の異名のある事によつて察知する事出來るが、これだけを以て直に古事記の御綱柏をオホタニワタリと斷定するのは、多少の無理がありはしないかとも思はれる。

九

以上で御綱柏についてのいろ〳〵の諸説を大体述べ盡したつもりであるが、御綱柏の正体は依然として斷定出來ないといふより外はない。私は古事記や日本書紀にある御綱柏といふものは、結局傳説の植物として見るのが穩當であるのでないかと思ふのである。古書に確かな形態の記載がないのであるから、今日これを何植物の事であると判定せんとするのは、頗るむつかしい問題といふよりも、寧ろ不可能といふべきであるまいか。伊勢記で

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

も宮川日記でも彼代の人の筆になつたものであるから、これ等の書物に御綱相といつてゐるものでも、それが果して日本書紀や古事記にあるものと同じものであるかどうかは、永久に解けない謎として残るものとしか考へられないのである。

兩畠山氏と紀州

一　畠山氏と紀州との關係

應永六年大内義弘が泉州堺城に據つて、將軍義滿に叛旗をひるがへした時、時の管領畠山基國（法名德元）は命を受けて、その子滿家（法名道端）と協力してこれを討ち、十二月廿一日の合戰において、敵將義弘を討取つて拔群の軍功あり、その賞として紀伊國を賜はつて、爰に紀伊、大和、河内三州の大守となつたものである。畠山氏と紀州との關係は、實にこの時に初まつたといつてよい。持國（法名德本）は實に滿家の子であつて、永享元年南朝の殘黨越知、久世等が擧兵の時、命をうけてこれを紀州に討伐したと傳へられてゐる。その頃畠山氏の威令が紀伊全國に行はれてゐたかどうかは、明かに知りがたいが、尚相當の勢力を有してゐたものと見てよからう。

兩畠山氏爭亂の當初において、紀州は常に兩黨の爭奪地であり、豪族各地に割據して、或は政長に黨し、或は義就に與して所在に相爭ひ、兩黨の勢力の錯雜してゐたらしいといふ事は、その頃兩黨から發せられた古文書によつて、斷片的に知る事は出來るが、現地においては何一つ具体的の記錄が殘されてゐないから、兩黨勢力の介野もはつきりせず、從つてその戰爭の有樣などは知るよしもない。

政長、義就兩巨頭なき後の紀州の形勢は、概ね政長の子孫に有利であつたやうであるが、それも尚順等の隱居せる廣城を中心として、せい〳〵今の有田、海草の二郡位と、根來寺衆徒位であつたのでないかと思はれる。その頃奥熊野一帶は堀内氏の領有であつて、一王國の觀があり、日高の湯川氏には直光の如き傑物あつて、その勢力は牟婁・有田の兩郡にも及んでゐたと見るべく、時に畠山氏に服し、或は叛きなどしたやうで、尚順はこれ等のために、遂に廣城から放逐されたといふやうな事もあつた。高政時代に於ての湯川氏は、畠山氏にとつては、根來衆徒と共に無二の援助者であり、實際姻戚關係があつたやうにも考へられる。一時的であつたとはいへ、湯川直光が河内守護代となつた事もあるし、終に河内教興寺の戰に於て、一族の多數と共に戰死してゐる点から見ても、その關係の深かつた事が知り得られる。畠山氏に對する雜賀黨の向背については何等記錄の徵すべきものなく、明かに知りがたいが、恐らく元亀、天正時代の如き勢力がなかつたのではあるまいか。

二　兩畠山氏紛爭の發端

畠山持國の養子政長と實子義就との家督爭ひは、應仁の亂の主因をなし、延いて天下の

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

大動亂を醸成せしむるに至つた。

初め持國子なく、弟持富の子政長を養つて嗣としたが、間もなく庶子義就が生まれたので、政長を疎んじ、後には政長をさしおいて、義就を以て家督とした。政長（左衛門督）は當代に傑出した武將であり、義就（右衛門佐）も亦名將の器であつた為、畠山氏の家臣は兩派に分れて抗爭し、細川勝元は政長を援け、山名宗全は義就を助けるといふ有様、それに偶〻時を同じうして勃發した將軍家や、諸大名間の家督爭ひとこんがらかつて、紛爭に紛爭を重ね、遂に重大なる事態を激成せしむるに至つたのである。

三　畠山義就嶽山に敗れて高野山に入る

寛正元年九月畠山義就は公方の勘氣を蒙つて河内に退いたので、畠山政長は台命を奉じ、大和勢を催してこれを攻めた。それより兩黨は河内各地に於て相爭うた。寛正三年四月には、政長の大軍が義就の立籠れる嶽山城を、三方より取巻いてこれを攻めたが、南の一方のみ紀州への通路自由であつた爲、未だその死命を制するに至らなかつた。然るに翌四年三月に至り、政長方は國見山に陣營を構へ紀州への通路を塞ぎて、その糧道を絶つたので、城兵支ふる事出來ず、四月十五日に至つて城遂に陷つた。義就僅に免れ、紀見峠を越えて高野山へ落ちていつた。

四　粉河、和歌山附近の戰

高野山にも亦政長に黨するものあつて、義就の久しく此處にとゞまる事をゆるされなかつた。五月二日山を下り、岡城（和歌山の岡山城ならん）に據つて舊部下を集め、粉河、和歌山等にて政長の軍と戰つたが、またもや敗れ吉野を經て熊野北山にのがれた。長祿記には、

「其後政長菖蒲谷長山ナンドニ諸勢共陣取、自ニ五月末一於ニ粉川一合戰及ニ度々一、六月廿一日大合戰、岩狹二郎、遊佐若黨中村左近將監、其外究竟衆三十人討死、中ニモ岩狹ハ既ニ被ニ責詰一、義就御腹被レ召ントシ給ヲ、岩狹御着長ヲ給リ、御身替リニ太刀打シ時刻ヲ移シ、其間ニ靜々ト有ニ御落一、去程ニ岩狹ハ義就ト名乘討死シケリ云々」

とあり、應仁前記によれば、六月廿一日の決戰は、政長自ら和歌浦の岡ノ城に押寄せた事になつてをり、岩狹二郎は湯淺二郎としてゐる。

五　畠山義就熊野を出づ

義就は熊野の奥に蟄居する事數年、その間畿内暫く靜謐を保つてゐたが、山名宗全の斡旋によつて恩免を蒙り、文正元年九月熊野を出でて河内に歸り、同年十一月廿五日大兵を率ゐて京師に入つた。翌應仁元年正月には、御靈の森に於て兩黨の衝突あり、これより洛の東西（東軍義就西軍政長）に分れて戰爭をつゞけ、洛内外の擾亂十一ヶ年の長きに及び、京中の大半を焦土と化せしむるに至つた。

六　兩黨また紀州に戰ふ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

文明九年九月東西兩軍の解体と共に、義就は二千三百の兵を隨へて本國河内へ下向した。河内、和泉の野に移り、紀州はその近接地でもあり、且は畠山氏の所領であった爲、大なる影響を蒙ったらしい。延徳二年七月には、紀州根來の僧徒は政長に與し、高野山の僧徒は義就に黨して互に相爭ひ、政長、義就もまた各兵を遣はして應援させてゐる。

七　畠山尚順紀州に入る

兩黨抗爭の裡に、義就は明應元年十二月十二日に病死し、その子義豊(仁總)跡をついで河内譽田城にゐた。政長その勢力の微なるに乘じてこれを滅ぼさんとし、將軍義稙の援助を得て、河内正覺寺に兵を進めた。翌二年三月には兩黨高屋城の西方にて會戰し、紀伊國衆は政長方として參加してゐる。然るにこの時細川政元は政長に含む所あって義豊を助け、赤松政則も政長を離れて、却って政長黨の根來衆徒、紀伊河内の兩國衆を堺附近に擊破した。この赤松氏の離反は政長にとっては、思ひ設けなかった事であり、四月廿五日遂に細川勢の包圍を受け、衆寡敵せず一子尚順(尚順後尚慶と改名、一本尚慶は尚順の弟とす)時に十三歳、侍臣に伴はれて大和に落ち、後には紀伊國衆や根來衆徒を賴って紀州に入った。

八　畠山尚順と畠山義豊との爭

畠山尾張守尚順は紀州に在って舊部下を糾合し、間もなく紀伊を略し、根來衆徒を和泉に侵入せしめて堺方面を騒がした。義豊も亦同年十月には兵を紀州に入れて、高野根來の僧兵と戰ひ、明應四年三月にも再び兵を紀州に入れてゐる。同五年十月には、尚順自ら和泉に出で、河内譽田の義豊を討たんとしたが成らず。同六年九月尚順また〳〵和泉に進入、十月義豊を河内高屋城に攻めてこれを破り、義豊一旦山城に退いたが、十一月再起、所在に敵を破って高屋城に迫ったが、尚順の擊破する所となった。同七年八月義豊その子義英をなして兵を進めしめたが克たず、その後も河内に入ってしばし〳〵尚順と戰ったが、同八年正月下旬河内平野城に敗れて、義豊は自殺し、義英は敗走した。

九　畠山尚順敗れて紀州に退く

かくの如く尚順の回復運動は着々効を奏し、その兵威紀伊和泉河内の三ヶ國に振ひ、尚順自身は河内高屋城にゐたが、明應八年九月尚順は兵を攝津に進め、義英の兵と中の島に戰って敗れ、十二月には細川政元、畠山義英等の勢と天王寺に戰って克たず、ついで高屋城も陷ったので、止むを得ず兵を收めて紀伊廣城に退いた。この頃尚順十八歳の若冠を以て、剃髪して卜山入道と號した。

尚順の河内退去後は、細川政元は義英を取立て、高屋城主とした。尚順これを聞き何とかして先敗の恥を雪がんものと、同九年八月根來僧徒數千人と和泉に出陣して細川元有を岸和田城に破り、九月更に河内に入って、義英を高屋城に圍んだが、偶〻細川政元、赤澤

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

朝經等の来援挟撃する所となつて大敗し、命からぐ〳〵また〳〵紀州に退いた。

一〇 兩畠山氏の和睦と離反

永和元年十二月尚順と義英との間に和議成り、義英は河内の北半國を肩して譽田城に據り、尚順は南半國を得て高屋城を鎮する事になつた。足利季世記には「永正元年十二月廿五日尚順と義英と和睦成り、河内官田の八幡宮に會合して酒宴し、永年の遺恨を忘れた、紀伊大和河内の人々和睦して悦事限りなし」といふやうに書いてゐる。如何にこれ等諸國の人々の打續く戰乱に苦しんでゐたかが想像し得られやう。然るにこの和平も永くつづかなかつた。同四年十二月に至つて兩者の和破れ、尚順の陣は義英の籠れる嶽山に押よせた。同五年正月城陷り義英は堺に逃れた。兩黨はその後も大和河内和泉の野に抗爭をつづけ、同十年八月の合戰にて義英敗れて堺に入り、ついで紀伊高野山に逃れた。同十五年九月には義英兵を和泉に出したが、意の如くならず、根來寺に退去した。

一一 畠山尚順廣城に隱居す

その後尚順は高屋城をその子植長に譲り、自分は紀伊廣城に退隱した。永正十七年二月義英は越智家全等と力を合せて植長を高屋に攻めた。翌月城陷り植長は一旦高屋城を立退いたが、五月再び復歸する事が出來た。

畠山義英は大永元年七月歿し、その子義宣が同四年九月河内日野に陣した時、植長は根來衆徒などの應援を得て烏帽子形城に陣して、相對峙したが、義宣は衆寡敵すべからざるを知つて、潜に紀伊に奔つた。同七年には植長と義宣とが和泉河内に戰つて多數の死傷者を出してゐる。義宣はその臣木澤左京亮長政の反叛により、これと爭つたが敗れ、天文元年六月自殺したといはれる。但し義英、義宣の没年については他に異説もないではない。

一二 湯川、野邊等畠山尚順に叛く

畠山尚順の廣城に在るや、ある年（天文元年ともいふ）日高郡小松原城主湯川直光（直春の又）その下知に從はなかつた。尚順これを打破つてその跡地を領有し、かくて紀州は數年間無事であつたが、天文三年三月紀伊の住人野辺六郎左衛門（門とあり）尚順に叛き、一揆を語らひて己の城（日高郡西本荘かに有田郡とあり）に立籠り、侮るべからざる勢力あつた。尚順獨力如何とも爲しがたきを知り、遊佐河内守長教の軍を河内より招き、相共にこれを鎮壓せんとしたが、先年放逐せし湯川の殘黨が山散場（足利季世記には山家とあり）（或は山野村のことか）といふ處に隱れてゐたが、俄に蜂起して野邊と合し、畠山勢を夜討してこれを破つた。尚順廣城に歸らんとしたが、廣近辺の民心既に離反しあり、一旦堺に遁れ、ついで淡路に渡つたが、間もなく同地光明寺にて病死（五十五歳）したと傳へられる。この戰によつて遊佐河内守は手負ひて河内へ歸つたとある。足利季世記などには、湯川等の夜討の前日、湯川民部少輔といふものゝ子に業阿彌といふ不敵の若法師あり、間隙となつて卜山の陣中に忍び入り、卜山を刺さんとして、遊佐河内守を傷けたのみで、捕へ殺されたとある。或は事實かも知れない。

卜山ノ事ハ大ニ永元年十月十七日ノ條ニ被載記サレ（季世記ニアリ）ニアラン事ヲ望ム

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

尚順の子稙長河内高屋に在ってこれをきいて無念に思ひ、同年七月大和河内の兵を率ねて紀伊に入り、湯川、野辺等を伐たんとし、根來の近くまで進入したが、所在一揆の蜂起多くして退治しがたく、日を過してゐたところ、河内の國にては畠山家の重臣等相はかり、その弟石垣左京亮長經（一本長継）を立てゝ高屋城主としたので、稙長進退に窮し暫く根來にかくれてゐた。

然るに高屋城に在りし長經は、性兇暴にして家臣の諫めを用ひなかったので、天文十年八月その弑するところとなった。紀伊に居た稙長は同年十二月河内に入って、義英の次子在氏を討たんとしたが、將軍義晴の内命によって和を講じた。かくて翌十一年三月稙長は遊佐河内守長教等に迎へられて、再び高屋城に歸ったが、同十四年五月病死（四十二歳）、子がなかったので、弟畋國そのあとをついだ。

一四　畠山高政家臣安見直政に追はれて紀伊に退く

河内高屋の城主畠山政國は隱居して紀州に去り、その子高政家督をついだ。家老遊佐長教よく軍國の庶政を決してゐたが、天文二十年五月五日刺客の手に斃れ、その子幼年であったので、安見美作守直政がこれに代った。直政性驕奢で高政を蔑如して專恣の行あり、高政が己を除かんとするを悟り、却って高政を斥けんとしたので、高政は永祿元年十一月三十日高屋城を出でゝ堺に走り、ついで紀伊に退き、直政は一時河内國を横領してしまった。

一五　三好長慶の義戰、畠山高政高屋城にかへる

細川家の重臣三好長慶は一代の風雲兒である。元は畠山氏の敵であったが、細川晴元に合む所あってこれと離れた。遊佐長教の女を娶って姻戚關係にあったので、この時安見直政を斥けて河内國を畠山氏の所領に復せしめんとした。直政これをきゝて河州の人數を催し、また根來僧徒の來援を請うた。永祿二年五月長慶は松永彈正久秀を遣はし、十河民部大夫一存（長慶の弟）に力を合せて、根來勢を和泉に討たしめたが克たず。六月自ら大軍を率ねて河内に入り、八月初高屋城を包圍燒討したので、直政敗れて飯盛城に走った。時に畠山高政紀州に在ったが、三好氏の義擧を聞きて、譜代の衆を糾合し、湯川直光、玉置與九郎等に擁せられて、堺まで來てゐたので、直に高屋城に入る事が出來た。

一六　湯川直光河内守護代となる

畠山高政いたく湯川直光の功を賞し、安見直政に代つて河内の守護代とした。然るに直光は田舍武士にて作法に慣はず、動作無骨にして國衆之に承服しないで、遊佐、安見を慕うた。高政かくては國衆に背かれて惡からんと思ひ、三好長慶にもはからず、湯川直光にほ名字を許し、畠山宮内少輔となして紀州へ還し遣はし、永祿十一三年五月再び安見直政を召出してこれに代うしめた。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

一七　三好長慶と畠山高政との爭

長慶かくと聞いて、高政の獨斷專行を怒り、弟豊前守之康（義賢ともあり、物外軒實休といふ）と相謀つてこれを伐たんとした。同年六月之康は四國の勢を率ゐて、尼崎に上陸し、七月河内に攻め入り、所在に高政、直政等の軍を擊破り、連勝の勢を以て八月高屋城に迫つた。十月十五日には、高政を助けんとして來た、根來の衆徒も敗退した。同月二十四日直政は飯盛城を捨てゝ、堺に走り、廿七日には高政も高屋城を去つたので、十一月長慶は飯盛城に入り、之康は高屋城に入つて、茲に河内國は三好氏の手に歸してしまつた。

然るに高政は無念禁ずる能はず、永祿四年七月岸和田城將十河一存の死をきいて、安見、遊佐、紀伊國衆、根來僧徒等と共に和泉に侵入し、十一月廿四日には豊前入道實休（之康の事）の四國衆と戰つて勝ち、十二月には高屋城の北なる三箇ノ城を取返した。

一八　和泉久米田の戰

三好長慶畠山勢の漸く盛んならんとするを聞いて、弟實休を將とし、安宅攝津守冬康（長慶の弟）、三好山城守康長、同備中守、同下野守等をこれに從はせ、岸和田方面へ出動せしめた、かくて兩軍近距離を隔て、相對峙するに至つた。永祿五年三月五日三好實休は岸和田附近なる久米田に陣したが、畠山高政は紀伊國衆、根來衆、安見等と共に、二手に分れてこれを襲撃した。三好方は篠原長房をして根來衆、安見勢を破らしめたが、紀伊國衆湯川直光、玉置與九郎等これにあたり、篠原勢苦戰に陷つたので、三好山城守、同下野守等、同備中守以下のものは、實休の手を離れてこれに向つた。それが爲め實休の手元は僅か百騎ばかりとなつた。その手薄なのを見てとつた畠山方は、新手を以て實休の本陣に迫つた。實休等奮戰したが、衆寡敵せず首將實休を初め討たるゝもの多數に及んだ。ついで三好氏の諸城は飯盛の外みな落城した。たゞ岸和田城は安宅冬康これを守りこたへたが後曉になつて退城した。この久米田の陣は兩軍主力の大決戰であつて、畠山方決定的の大勝を博したわけである。

一九　河内教興寺の戰

畠山勢は思ひがけぬ大勝を得たので、高政は高屋城に入り、三月中頃より安見勢、根來衆一味して、三好修理大夫長慶の據れる飯盛城に押寄せ、晝夜これを攻めたが守り堅固にして拔く事出來ない。四國攝津に在る三好勢は飯盛城の安否を氣遣ひ、三好山城守康長を先鋒として、同筑前守義興（長慶の子）、同日向守政康（一本長縁）、同下野守定逸（一本政康）、同備中守、安宅攝津守冬康、松永勢、攝津衆等無慮八千餘人、救援に向ひ、五月十九日には渡辺川を渡つた。この時三好方より間牒を放つて、畠山勢を混乱せしめたので、諸勢浮足たち、高政は十九日に高屋城へ引上げた。二十日紀伊衆湯川勢、根來衆徒等後陣をなし、河内教興寺に陣せるを、三好方の大軍一手となつてこれを襲撃した。首將湯川直光をはじめ根來衆等三千餘人、面も振らず敵中に切入り、力闘したが衆寡敵せず、湯川直光以下死傷算なく、殘衆ちり〳〵と成つた。飯盛城責手の畠山勢この由を聞いて退却、安見直政は大阪石

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

山に逃れ、畠山高政も高屋をすてゝ堺に奔つた。根來の首將岩室坊は信貴山に逃れたが數日後討取られた。この合戰に於て畠山方の討死六百餘人、三好方は死者三百手負一千餘人、といはれる。

この教興寺の戰のことは、兩細川家記、足利季世記、續應仁後記等に詳細の記事あり、湯川記また大体の事實を傳へてゐる。今この戰爭に參加して生還した、田辺の目良高湛の手記（田辺町誌所載）によると、その時の戰死者は、

「湯川直光の外、目良家にては兄弟三人（即高湛の子で、湛清、湛経、重國の三人也）、被官山際（重三郎）、仲間四人。其他、神保（左衛門尉）、安宅新介父子、貴志（五郎）、白樫（五郎兵衛）、方堅田（方田伊豆守？）、富田（牛之助）、飯沼九郎左衛門、龍神刑部。湯川家にては湯川民部丞、同甚大夫、同大夫右衛門兄弟、湊上野、同紀介、湯川家之人數七十三人。國衆面々五十餘。根來寺人數二百餘、以上三百餘之打死」（括弧内は筆者記入）

となつてゐる。以てその戰鬪の如何に劇烈であつたかゞうかゞひ知られる。この一戰によつて畠山氏の勢力は河泉の地より一掃せられる事となり、永祿六年十月には根來寺の主だちたものが泉州に到つて、三好氏と和議を結んでゐる。

二〇　松永久秀と畠山高政

永祿七年七月四日三好長慶は河内飯盛城に於て四十三歳を一期として逝いた。嗣子義興はその前年八月に早世し子なければ、長慶の弟十河一存の子義継（一本義次）を嗣とし、その一族

なる三好日向守政康（一本長緑）、同下野守定逸（一本政泉）、石成主税助左通等の所謂三好三人衆と松永彈正久秀とにて庶政を參決した。然るに後に至つて、三人衆と松永久秀と威權を爭うて確執止まず、三好家の者共二派に分れて兵を交ふるに至つた。時に三好左京大夫義継高屋城に居たが、松永久秀は種々策謀を廻らし、教興寺の敗後流浪の身であつた、畠山高政を取立てゝ一方の將となし、舊臣遊佐、安見等と和睦せしめた。

永祿九年二月畠山高政、根來衆徒、泉州衆等は松永久秀とばかり、その數合せて七千餘、三好三人衆を討たんとて和泉に入り、堺南北、遠里小野に陣し、ついで河内へ亂入したが、三月には堺近郊に戰つて大敗した。

永祿十年二月三好義継は三人衆と衝突し、松永、畠山等と和して、相共に三人衆と戰つた。

永祿十一年九月織田信長の軍勢京洛に入るに及んで、その兵威近畿一帶を壓した。同年十月には、三好義継、松永久秀、畠山高政等は、攝津芥川城にて信長に謁して款を納れた。信長乃ち大和一國を松永久秀に與へ、河内半國は三好義継に、殘り半國を畠山高政に與へられたので、高政はまた高屋城主となる事が出來た。

二一　畠山高政紀州に退く

永祿十二年秋の頃より畠山高政は家老遊佐河内守信教、安見美作守直政等の権勢己を凌ぐを見て喜ばず、兩人を除かんとしたが、却つて危險己の身にせまつたので、せんすべも

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

なく高屋を出でて紀州に去つた。畠山高政のその後については、京堺の間を放浪して天正四年十月卒したともいはれ、後に足利義昭より召出されて若君の傅となつたとも傳へられてゐて明かでない。

河内高屋城に於ては遊佐、安見等相議して高政の弟昭高を迎へてその主とした。

二　畠山家の末路

さきに織田信長のために破られて、四國へ下つた三好氏の殘黨は、その後再起をはかり、元亀元年七月攝津中島天滿の森に陣取、野田福島に城砦を構へ、勢漸く盛んであつた。雜賀の鈴木孫一はこの時三好勢に參加してゐる。信長これをきゝ、美濃尾張三河遠江の大兵を從へて上洛し、八月廿六日には攝津天王寺に陣した。所在の豪族織田氏に應ずるもの多く、九月四日には根來の衆徒數千人これに應じ、畠山衆、紀州の湯川、玉置の名代の勢一千餘人も來りて天王寺の陣に加つた。ついで野田福島へ押よせ合戰に及んだが、偶〻朝倉淺井の勢京都へ攻め上らんとするの報あり、同月廿三日開陣した。この時近畿の衆にはお暇を給はり、各自城に歸つて休息すべしとの事であつたが、湯川、玉置、根來の者共は近所に領地もなく迷惑したと傳へられてゐる。

この比河内半國の主畠山昭高は守護代遊佐河内守信教と隙あり、元亀二年六月十五日その攻むる所となつて、高屋城に自殺した。

その後、紀州にては畠山高政の養子貞政（定政ともあり、高政の弟政頼の子也）有田郡岩室城に在り、附近を領有してゐたが、織田信長が石山本願寺と事を構へた時、雜賀根來の徒に擁せられて本願寺に黨したが、羽柴秀吉南征のとき逃亡し、その終ふる所を知れないとも、その後攝津に閑居して寛永十八年三月天壽を終へたとも傳へられる。豊公遺文所載、秀吉が紀州表陣中より小早川隆景に送つた文書には、「畠山式部大輔、村上六右衛門親子三人、柏原父子、根來寺法師蓮藏院以下數多討果、畠山居城戸屋城乘捕候」とある、或は貞政の居城は岩室城ではなくて、鳥屋城であつたのかも知れない。

織田信長と紀州

一　足利義昭と信長との不和

信長は尾張に起つてまづ美濃を平げ、德川、武田兩氏と結んで東顧の患を斷ち、轉じて伊勢に入り近江を從へ、永祿十一年九月には足利義昭を擁して京師に入つた。

更に攝津に在る三好氏の諸城を拔き、河泉の諸豪も亦潰えて、織田氏の勢は實に昇天の如きものがあつた。かくて義昭は征夷大將軍に補せられたが、その實權の信長に歸するのを見て心竊に喜ばなかつた。そこで三好、松永、毛利、宇喜多等の諸氏の援助を求めて、信長を卻けやうとし、兩者の間に兵を交ふるに至つた。天正元年十一月には義昭親ら紀州

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

に入り、由良の興國寺に在って同志を募りし事もあった。

二　本願寺義昭に應ず

天正二年三月義昭は徳川、北條、武田、上杉の諸氏に請うて、本願寺と協力して信長を討たしめやうとした。時に本願寺の顯如は難波石山に在り、兵を蓄へて勢力あった。元亀元年以來屢〻織田氏と兵を構へたが、こゝに至って先づ兵を擧げて信長に抗した。攝津、大和などの士の本願寺に味方するものも續出した。信長將士を遣して石山城に備へ、一方その外援を絶つため、長篠の一戰武田氏を破り、更に北國の一向宗徒を掃蕩したので、大勢漸く本願寺に不利となり、天正三年八月に至って遂に和を請うた。

さきに義昭の賴みに應じなかった毛利氏も、信長の中國侵略の手の漸く自己に迫ってゐるのを察知して兵を擧げやうとした。本願寺またこれと通謀して石山城を修め、飛彈、加賀、越中等の宗徒を糾合して信長に叛いた。天正四年六月、信長は、惟任日向守光秀、長岡兵部大輔藤孝、原田九郎右衛門直政、荒木攝津守村重、筒井順慶等に命じ、大兵を以て石山城を攻めさせたが、勝敗容易に決せず攻圍久しきに亙った。

三　雜賀黨本願寺を援く

紀伊國雜賀の地に鈴木孫一、土橋若大夫などの土豪あって盛に紀北地方に張ってゐた。深く顯如を信じてゐるので、しば〳〵本願寺を援けて兵を畿内へ出したが、この時また紀伊の守護畠山貞政や根來寺の衆徒と語らひて、和泉貝塚、紀伊中津等に城砦を築いて兵をあつめた。信長本願寺を屈服せしむるには、まづ雜賀を討ってその外援を絶つに如かずとなし、その機をうかゞってゐた。

四　太田黨信長に通ず

雜賀の近くに太田郷がある。この辺もと日前宮の神領であったが、戰國の世となって邑豪縱まゝにこれを押領し互に相爭ってゐた。雜賀黨またこれを奪はうとして屢〻戰を挑んだ。然るに太田黨は獨力これに抗する事が出來ないので、根來の僧徒を賴んで援となし相共にこれに當ってゐたが、織田氏に雜賀征伐の意あるを知り、好機到れりとなし、織田氏の力を藉りて雜賀黨に一泡吹かせやうとして、信長に款を通ずるに至った。

信長公記によれば、雜賀三緘の者及び根來杉之坊等のお味方すべき御請を申上げたのは、天正五年二月二日の事となってゐるが、太田黨が信長に應ずるに至るまでには、織田氏の諜臣が太田懷柔の爲に内部的にいろ〳〵苦心せられ、兩者の打合も充分出來、いよ〳〵といふ準備も成ったので、この時信長へ御請を申出られたものと想像する事が出來る。それにはその前年即天正四年五月信長より下されしと思はれる、次の古文書によってそのいきさつを察知する事が出來ると思ふ。

藥　制　一軍勢甲乙人等亂入狼藉事

紀伊國太田

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

一伐採山林竹木事
一陣取事

右條々堅令停止訖若有違犯之輩は速可處嚴科者也仍下知如件

天正四年五月　日　　信長公朱印

就雜賀成敗可抽忠節之由神妙候、根来寺事是又無二可馳走之旨申遣候、其以前急度參及行者別而可爲忠儀候、立色次第良可出人數候、恩賞事依戰功可隨望候也

五月十六日　　信長公朱印

宮郷
中川郷
南郷
三組惣中

其方相待一左右詰卒在陣候、三組若共並根来衆勸之趣、急度見究可申越之、隨言令加勢、又我等も可進事候、不可有由斷候、猶兩人可申也

二月二十日　　信長公朱印

左兵衛佐殿

この外に五月十九日付で、太田源三大夫と神前中務に與へられたものが、紀伊續風土記に出てゐる。左兵衛佐といふのは多分織田信張の事と思はれ、この人が天正四年二月ごろの地方に來てをられたとも考へられるのである。

五　雜賀三緘といふ事

序に、雜賀三緘といふ事について少しく調べて見たい。この語の出所は既記の如く信長公記、天正五年の條に「二月二日紀州雜賀内三緘之者並根来寺杉之坊御身方の色を立可申の御請申に付て、則三十日に可被放御動座の趣御國々へ被仰出」とあるに由つたもので、これには三緘之者とあり、また二月十八日の條に「根来杉之坊、三緘衆爲案内者云々」とあつて、人名でない事は明かであるが、これを人名と誤つて取扱つたものも少くない。

信長公記とは別のものに信長記といふ本がある。これは太田和泉守の書かれた信長公記の記事を小瀬甫庵が判り易く書き下したもので、それには「二月二日雜賀の三緘といふ者云々」とあつてこれが人名とした始まりで、日本外史には「信長招二降賊將雜賀三緘、根來杉房一云々」とし、大阪府全志第五巻和泉千石堀城址の記事中に「天正年間本願寺門徒の攝津石山城に據りて織田信長と爭ふや、紀州の雜賀孫一郎、同入道三緘云々」とあつて、念入に入道になつてゐる。

然らば三緘とは何を意味するかといふと、これは人名でもなければ地名でもなく、實は三組といふ事と思はれる。堀市史に「紀伊雜賀の三緘（緘は組の義）及根來の杉坊等入京して

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

款を通じ云々」とあるのが正しい説である。私思ふに三緘といふ熟語には、三組といふ意味は少しもないから、これは初め三組とあったものを、傳寫の際三緘と書誤ったものと認むべきであるまいか。前出信長公朱印狀中、左兵衛佐宛のものに「三組者共」の語句あり、また他のものに、宮郷、中川郷、南郷の次に三組摠中とあるゆゑ、この三ヶ郷の事である事も明かである。尤もその頃京阪方面の人々の雜賀といつたのは、和歌山附近一帶を指したやうで、單に所謂雜賀荘と限つていつたのでもないらしいから、猶更今の和歌浦附近だけの事でないのはいふまでもない。石山本願寺日記下巻顯如文案中に

今度信長根來寺相談可爲雜賀亂入之由頻申來候、一段無心元候、此度之儀候條於門下之輩者拋萬事雜賀へ罷越一味同心可成其働事尤難有次第候、佛法之安危此節候、能々可被加思案候、かやうの儀につきてもいそぎて一念歸命の於安心決定者まことに命もおしからぬ事にて候へ、一人ものこらず信心治定せられ候はゞ眞實々々可爲本懷候、返々其表の馳走肝要候也

五月廿三日

紀州三ヶ郷門徒中へ

顯如御判

といふのがある。年號は判らないけれど、これは想ふに根來寺と三ヶ郷が信長に應ずるといふ事を聞知り、大に驚きてその反省を促したものであらう。

六　信長の雜賀征伐

天正五年二月いよ〳〵大兵を動かして、一擧雜賀黨の巢窟を衝かうとした。即ち信忠は美濃、尾張等の兵を率ゐて岐阜を發し、信孝、信雄亦近江に赴いて信忠に合し、丹波、丹後、若狹、越前、播磨の將卒も相ついで京都に集まった。こゝに於て信長はいよ〳〵諸軍を督して京都を發し、八幡、若江を經て泉州春日庄に抵り、二月十八日には佐野の郷に到り、二十二日には更に信達に陣を進めた。軍を二手に分つて山手の方へは太田、根來の者どもを嚮導となり、佐久間右衛門信盛、その子甚九郎正勝、物柴築前守秀吉、荒木攝津守村重、別所小三郎長治、堀久太郎秀政等の大軍潮の如く殺到し、ゆく〳〵火を放つて攻めたが、雜賀勢川を前にして川岸に柵を構へ、弓鉄砲を以て必死に防戰したので、容手討るゝもの少からず、退いて川を限りて對陣するの外なかった。

濱手の方に向へるは、瀧川左近一益、惟任日向守光秀、惟住五郎左衛門長秀、長岡兵部大輔藤孝、筒井順慶等の勢なるが、淡の輪口よりは道せまくして進み難い。三手に分れて山といはず谷といはず、ひた押に進擊せんとするも雜賀勢天嶮を利して防戰これ努めた。この時長岡藤孝の内に下津權内といふ豪の者あり、一番鑓を合せて比類なき働をなした。かくて所々燒拂ひつゝ進み、中津城を攻めてこれを陷れ、秋田城介信忠のこれに入ったのは二月二十八日の事である。

三月二日には信長本陣をとつとりの御若宮八幡に進め、一部の將卒を根來口に差遣はし、更に諸將を督して雜賀黨の本據にせまらしめた。城兵よく戰ったが後に至つて漸く窮し、鈴木孫一等七人のもの連署を以て誓紙を納れ降參を願ったので、三月十五日に至つてこれ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

を許し、佐久間右衛門等を駐めおさて三月廿一日軍を還された。雑賀城降服のとき信長より下された朱印状は次の通りである。

今度雑賀事可加成敗之處可抽忠節之旨以誓紙申候段被聞召届候、然上者無異議被赦免之向後別而粉骨專一候、猶小雑賀向在陣者共可申也

三月十五日　　信長公朱印

鈴木孫一との へ
栗村三郎大夫との へ
島村左衛門大夫との へ
宮本兵部大夫との へ
松田源三大夫との へ
岡崎三郎大夫との へ
土橋若大夫との へ

七　雑賀太田また爭ふ

これより雑賀、太田の兩黨曾く和平を得たが、天正六年五月信長また石山城を攻めたので、顯如は使者を送りて雑賀、太田、根來の者どもに來援を求むる事頻りであつた。雑賀黨これに應じたが、太田黨は織田氏往年の知遇を忘れずこれを拒絶したので、雑賀黨は近鄉を語らひ太田城に攻め寄せたが、城堅くして抜く事能はず和議をとゝのへて去つた。

雑賀黨は本願寺にとつて實際強力なる援助者であつたのである、この頃織田氏との抗爭に於て雑賀の援助を求むる爲、顯如より紀州門徒に送つた文書が、石山本願寺日記中の顯如文案中にあつて、どれほどその援助を期待してゐたかが想像し得られる。今その中から一二を抄録する。

態染筆候、鐵炮衆可參候由度々申下候へども千今無其儀候、近比油斷候、然者信長他國たちと號し二三日中に不圖此表へ可相働之由告來候、又荒木など火急に中島か安田之城へ行すべきよし候之間、時分からいかゞうの隙入候とも片時も早々罷上馳走頼入候、くはしく刑部卿法眼可申下候、あなかしこ

（天正六年）九月朔日　　顯如　御判

紀州門徒衆中へ

度々申下候へ共しかゝとおどろき無之事不審千萬候、信長昨日廿三京上由候、彼分國へ陣ぶれは廿七日此表へ可有着陣由候、中島表敵之城候へば十日已前より信長手廻之衆を入置、難波之島に要害を相構大船を可入置候、左候へば下警固渡海候ともなにとも了簡に及まじき由候、下警固を不待付已前出來候ては餘無念之次第候、諸城無人當寺無人之儀敵に無其隱由候、此度信長着陣候はゞ當寺可相果事必定候、其時は國にも可爲後悔に歟、萬端をさしをき鐵炮千丁夜を日につぎて參着之儀可喜入候、おそくとも候ては不可有曲候、方々よりも注進不大方候、爲其染筆候、恐々、自飯米衆へも申下

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

候、猶刑部卿法眼可令傳語候也、穴賢々々

（天正六年）九月廿四日　　顯如御判

紀州惣門徒中へ

八　信長九鬼嘉隆に大船を造らしむ

石山城の攻略にあたっては、その海上權を掌握し毛利氏などよりの援兵や糧食輸送を絶つ必要があるので、志摩の九鬼右馬允嘉隆に命じて大船六艘を造らせ、また伊勢の瀧川一益をして別に一艘を白船に造らしめ、天正六年六月十六日順風を見計って熊野灘に押出し、大阪灣へ廻航せしめようとした。

この大艦隊の出現は石山本願寺にとっては、少からぬ脅威であったと見え、次のような書狀を紀州門徒に送ってその廻航を阻止させやうとした。

急度被仰出候、仍自信長於伊勢浦大船被申付、近日紀州浦に差上候由注進候間成其心意せるかな、この大艦隊が紀伊水道にさしかゝった時、雜賀、淡の輪の徒浦々の小舟を

急度被仰出候、仍自信長於伊勢浦大船被申付、近日紀州浦に差上候由注進候間成其心意候、其國於浦々相支事肝要候、彼大船之事海上自由に不可成立由候得共若上船之者大事之始末候條、各申談可被成共働由堅被仰出候、仍被排御印候謹言

七月八日　　少進法橋　仲之判

按察法橋　賴龍判

紀州諸浦御門徒中

集めてこれを要撃した。嘉隆その近づくのを待ち、一齊射撃によってこれをうち退け、七月十七日堺の津に入った。この船は鐵製のもので幅七間長十二三間計の大船で見る人驚かぬものはなかった。信長態々安土より來って盛んな觀艦式が行はれた。その後嘉隆は堺浦に在って海上交通を監視して近海の防備にあたり、同年十一月六日には毛利氏の兵船六百艘の來援したのを撃退した。

九　本願寺顯如紀州へ去る

天正六年十月荒木村重は本願寺と通謀し、攝津在岡城に據って信長に叛いた。信長その毛利氏などと協力するを恐れ本願寺と和するの意あったが、本願寺はこれに應じなかった。その後村重と共に叛いた攝津の諸將は信長に攻められて、或は和し或は降って本願寺側にも和議が起った。天正八年三月信長と本願寺との間に和議成立し、信長は勅許を得て顯如に石山退去を迫った。益し教如のみ石山にとゞめて父子義絶せしむる爲であった。雜賀黨は由來本願寺と宿緣淺からず、且は深く顯如に歸依してゐたので、信長の許しを得て、船を以てこれを迎へんとし、顯如に於ても反覆常なき戰國時代の武將を相手としてゐる事故、まさかの場合防戰に都合のよい地を撰び、雜賀門徒の武勇を唯一の頼みとして紀州に移る事となり、同年四月九日に至り大阪を去って和歌山灣の森に入った。

一〇　信長と高野山との紛爭

天正七年十一月荒木村重の居城の陷った時、村重は逃れて毛利氏に投じたが、その一族子女の捕へ殺さるゝもの數百人、實に悲慘の極みであった。その殘黨のうち高野山に逃げたものあり、後に至って信長これを知り使者を遣はして捕へしめやうとしたが、山僧これを庇隱して命を用ひず、剩さへその使者を殺したので、信長大に怒りその報復手段として、天正九年八月頃までに所在に高野聖を捕へてこれを殺す事數百人に及び、それより兩者の間に暗雲低迷久しきに亙ってはれやらなかった。

和歌山縣誌や紀伊續風土記によれば、高野春秋や高野亂妨記といふ本には、この年十月二日高野攻伐軍の部署を定め、堀久太郎秀政を先陣として、十數萬の大軍高野山の七口を差し塞ざて包圍攻撃したが、偶〻翌十年六月二日未明本能寺の變勃發せしため、圍を解いて退散、山徒追撃って大勝を博したやうに書いてあるとの事であり、多聞院日記天正九年八月十九日の條にも、

「高野ノ宿坊ノ庫ノ物可請取之由、依之諸國高野聖トラエラル、近日可有之手遣之由及沙汰云々、則來廿三日陣ブレ在之云々、高野滅亡時刻到來歟」

とある位故、色々取沙汰のあった事は事實らしく、この時信長方に於て小部隊の軍を動して高野山へ備へた事はあったと思はれるが、傳へられるが如き大兵を以てしかも長期にわたる、大袈裟な高野征伐のあづたといふ事は、確かな文獻には見えないから、誇張の記事と考へるより外ない。紀伊續風土記には、高野亂妨記といふ本は天正十年七月三日錄とあり、多分實錄であらうとしてゐるけれど、私には信じられない。

二　鷺の森攻圍戰は架空の記事

大げさなる高野討伐説と同じやうな事柄が、丁度時を同じうして和歌山鷺の森にもあったやうに傳へられてゐる。紀伊名所圖會一の巻上に、鷺の森越陂跳由來之事として一大合戰のあったやうに、頗る詳しい記事があり、石山退去録といふ本にも大同小異の記事あるし、日本外史にさへ「信孝勃在二大坂一、奉二信長密旨一、宣二言脩一レ盬於二紀伊一、因急襲二鷺森一殺二光佐一而變報至、信孝與二信澄一長秀一議解レ圍而退」とあって、宛ら戰爭のあったかのやうに思はれるが、この鷺の森攻圍戰の事は肝腎の鷺森日記に何一つ書かれてなく、その頃鷺の森では至極平穩無事、殊に織田信孝、丹羽長秀等は四國に向ふため、攝津住吉に滯陣中であり、全く根も葉もない記事であって、高野山大架裟討伐説と同樣、例の怨敵調伏佛敵退散といふ事に、巧みに本能寺の變をとり入れて仕組んだ架空の記事であって、おきまりの浮屠氏の舞文に過ぎない事は明かである。

三　雜賀黨の内爭

天正十年正月廿三日鈴木孫一、土橋兵大夫、土橋小左衞門等同士を語らひ、内々信長の上意を得て土橋若大夫を宇治橋上に襲うてこれを殺した。蓋し過ぐる年孫一の近親が若大夫の爲に討果されし遺恨によるといふ。この報注進に及んだので、信長は岸和田在城の織

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

田佐兵衛佐信張をして赴き援けしめた。若大夫の遺子平之亟、平次等は根来泉職坊の末裔を得て防戦したが勝たず、城をあけて落行きしを、泉職坊は途中にて討取られ、若大夫の遺子は伞奏郡にのがれた。二月八日土橋城内の殘黨も降伏したので織田左兵衛佐城代としてこれに入り、翌九日には野々村三十郎幸久もこの方面警固として来着、兩人とも廿三四日頃まで滞留してゐる。その後本能寺の變後若大夫の遺子は再び郷里に歸り、土橋兵大夫を襲うてこれを殺し父の仇を報いたが、鈴木孫一、土橋小左衛門等は身を以て僅に免れたといはれる。

この雜賀内爭の事は信長公記にも鷺森日記にも書かれてあつて、その殺されたのを信長公記には土橋平次とし、鷺森日記には土橋若大夫として平次は若大夫の子になつてゐる。また紀伊續風土記には平次後に若大夫と改名とあつて、兩者の辻褄を合せてゐるが、今は現地に近い當時の記錄たる鷺森日記の方が正しいものと認めてこれによる事にした。

泉職坊と書くのも鷺森日記によつたもので、信長公記には千職坊とし、紀伊續風土記には泉式坊となつてゐる。この泉職坊といふのは若大夫の子ともその緣辺のものとも思はれるが、今は何れとも決定しがたい。序に申すべき事は、よく天正兵亂に出て来る根來寺の杉之坊、泉職坊などいふのは、各根来寺一方の門主の事であつて、これを個人の名と考へるのは當らないといふ事である。

前記泉職坊の最期についても、信長公記には「二月六日千職坊三十騎計にてかけおち候を齋藤六大夫追懸討捕、千職坊の頸は二月八日安土へ持參候て懸御目候處、森乱御使にて御小袖並御馬爲御褒美齋藤六大夫被降、外聞憚面目、則安土百々橋詰に千職坊頸被懸置各見物仕候」とあれど、鷺森日記には「泉職坊夜中に紛出たるを泉州泉寺田又右衛門於陣所討捕之」とあつて合致しない。或は寺田又右衛門配下の齋藤六大夫が討取つたと見るべきかとも考へられぬでもないが、今はかういふ兩説があるといふ事を記しおくにとどめる。

豊臣秀吉と紀州

一　秀吉と徳川家康との對立

天正十年六月二日未明に突發した本能寺の變は、實に青天の霹靂ともいふべき大事件であつた。天下の形勢は忽に急轉廻した。

光秀を滅して昇天の勢を示せる秀吉と、威名東海を壓せる家康とが、信長の遺子をさしはさんで相對立するに至れるは、蓋し當然の成行といふべきであらう。初め秀吉は信長の嫡孫秀信を立て、嗣となし、織田信雄をしてこれを輔佐せしめた。信長の第三子信孝は兄信雄とよからず、柴田勝家、瀧川一益等とはかつて秀吉、信雄等を除かんとした。そこで秀吉は勝家を越前に滅し、一益を伊勢に降した。然るに信雄亦秀吉の威名を忌みてこれを斥けんとして援を家康に求めた。家康乃ち大軍を率ゐて小牧山に陣し、秀吉の軍を長久手に

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

破つた。

二　紀州勢徳川氏に應ず

天正十二年徳川家康小牧山に陣せるとき、井上主計頭を使者として紀州の諸豪士に援助を求められた。時に太田左近、太田源三大夫等附近の郷士三十六人、これに根来の杉之坊等も加はり、一同日前宮に參集凝議の上血判連署の書札を認め、太田村惣光寺の住僧を行脚の体になし、袈裟の中に右の血書を縫込みて行かしめた。家康これを嘉納せられ、秀吉の尾張に出づる機をうかがひ、兵を出してその背後を衝くべしとの御状を得て歸つたので、一同また參集、日を定めて出陣する事になつた。

以上は太田水責記や太田惣光寺縁起などにあつて、紀伊續風土記その他後世に書かれたものは大抵これによつたものゝやうであるが、佐久間軍記といふものには次の如き異説もあれば、全部が實録に近いものであるかといふ点については一抹の疑点がないでもない。

「天正十二年甲申秀吉ヨリ信雄ヲ亡サントシ給フ、家康公ハ信雄ヘ御助成也、秀吉ト兩公ト尾州ニテ對陣アリ、保田久右衛門（佐久間備前守のこと）ハ志津嶽合戦ノ後根来ニ住居スル所、家康、信雄兩公ヨリ被ニ仰下一アイタ、譜代ノ家人等招ニ根来法師一紀州軍士ヲ催、河州國見山ニ城ヲ築補襲、河州、泉州ノ國侍ト挑戦、秀吉公聞レ之中村孫平次一氏（公卿少輔房）ヲ泉州岸和田、城ヘ被ニ指下一、三月ヨリ十月迄ニ屢戦云々」

三　秀吉紀州に備ふ

これより先、根來、雜賀、太田の徒秀吉の下知に從はず、動もすれば反抗の氣勢を示した。然るに當時四方多事で未だ紀州へ手を下すに至らず、岸和田城番中村孫平次一氏を以てこれに備へ、蜂須賀小六家政、黒田吉兵衛長政、前野將右衛門長泰、赤松下野守晴政（則房ともあり）、明石左近則實、生駒雅樂頭親正等をしてこれを援けしめた。この頃秀吉から紀州の豪族にその援助を求められたと見え、秀吉から湯淺城主白樫左衛門尉實房に與へられたといふ文書が太田水責記の追加記事中にある。併しその文書の出典も不明な上、確かな文献にその間の消息の傳へられるものが見當らないので、今は只參考として附記しておくにとゞめる。

至其國出馬刻可抽忠節旨尤候、就夫官原殿身上の事何後不可疎意候、然者知行方の儀有田郡臼高郡並南郷之内大野庄野上山東郷宛行之候、其方一身之面々も以此内可申付候、猶渡辺宮内少輔可申候、恐々謹言

天正十二年正月廿七日　　秀吉公墨印

白樫左衛門尉殿

四　紀州勢和泉に入る

泉州の千石堀、澤、積善寺、畠中等の諸城砦は夙に紀州勢の勢力圏内にあり、常に兵を駐めて岸和田、堺方面に對する絶えざる脅威となつてゐた。天正十二年三月秀吉の大擧尾

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

張に向はんとするを見て、同月十八日には海陸兩方より大津に押寄せ、越えて廿一日また〳〵海陸兩方より大擧攻來り、一隊は堺を衝き、他は岸和田城にせまった。城將中村一氏打って出で、黒田長政、蜂須賀家政等の各軍これを助けて奮戰し、國泉寺田又右衞門等亦よく戰ったので、紀州勢頗る頑強に抵抗したが、遂に擊退せられた。堺を襲へる一隊は市中に侵入し、更に住吉に到ったが、岸和田方面の激戰を聞いて兵を還し、一旦散じた岸和田手のものも亦來り戰ひ互に勝敗あったが、偶〻小牧表にて和議成れりときゝ、千石堀、積善寺、澤等の諸城に兵を駐めて紀州へ引あげた。

五　秀吉の紀州征伐

根来寺は覺鑁上人の開基にして、鳥羽上皇の勅願所である。元來佛法修行の靈地であったが、足利氏の中世以後天下大に亂るゝや、徒に僧兵を集めて戰爭を事とし、掠奪を專らとするやうになり、遠近常にその暴虐に苦しめられた。信長の歿後秀吉天下を統一し海内風を望んで歸順したが、根来の僧徒その威令に從はず、雜賀の徒亦一向一揆の巢窟となつて、屢〻信長に叛き、今また德川氏と結んで己にも抗するに至ったので、愈〻大兵を紀州へ出す事になった。

天正十三年三月廿日先陣をして和泉に入らしめ、翌廿一日秀吉親ら諸大名を從へて大阪を發した。大和大納言秀長、羽柴中納言秀次を副將として十餘萬の大軍を二手に分ち、一は山手より他は海道をとりて併び進擊せしめた。

六　和泉の諸城陷る

紀州勢豫めこの事あるを知り、泉州の諸城に據ってこれを防止せんとした。秀吉乃ち秀次をして泉州第一の堅城千石堀に向はしめ、細川與一郎忠興、蒲生忠三郎氏鄕等をして積善寺に向はせ、中川藤兵衞秀政、高山右近重友等をして海道一の澤城（濱城とも云ふ）に向はしめ、堀久太郎秀政、筒井伊賀守定次、長谷川藤五郎秀一等をして一路根来を衝かしめやうとした。然るに千石堀には殊に精兵多く、弓鐵砲の名手數百人を出して、堀秀政等の軍を要擊し、上方勢に多數の死傷者を出した。秀次これを見て田中吉政、渡瀨詮繁等をして赴き援け相挾擊してこれを破らしめた。筒井、長谷川の各軍これに續き、追擊ちて千石堀に攻め寄せたが、堀深く構堅くして城兵よく戰ひ、激戰數刻寄手討たるゝもの多く策の施しやうもなかった。偶〻寄手より放った火箭のうち城内の火藥箱に命中せるものあり、轟然爆發城内忽ち火と化し、寄手これに乘じて討入り城遂に陷った。尋いでその他の小砦亦潰滅した。たゞ積善寺、澤の城兵よく守り防戰これ努めたが、やがて力盡きて降をこふに至った。この時羽柴秀長より城兵に與へられた證書は次の通りであって、これによって積善寺は一に尺禪寺とも書き、澤城の澤入城といった事や、その落城の日なども判る。

御出馬之上は盡可被打果儀定に候得共、最前之以筋目種々令懇望候間命之儀申助候、然間聊以不可有表裏候、若偽有之者、大日本國六十餘州大小之神祇殊氏神愛宕山權現兩宮八幡可蒙御罰者也、仍普詞如件

天正十三年三月廿二日

美濃守秀長判

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

尺禪寺連判衆中

御出馬之上は悉可被打果儀定候得共、最前之以筋目種々令懇望之間命之儀申助候、然間聊以不可有表裏候、若偽有之者、日本國六十餘州中大小神祇殊氏神八幡大菩薩愛宕白山之可蒙罷御罰者也、仍如件

天正十三年三月廿三日

澤入城衆中

羽柴美濃守秀長判

七　根來寺燒亡及雜賀降服

三月廿三日秀吉新手の軍勢を以て勝に乘じて根來寺に迫らしめた。根來燒討太田責細記といふものには、この時寄手と根來勢との間に花々しい激戰があつたやうに書かれてゐるが、これは大部分誇張の記事である事は明かであつて、その眞相はその頃の實錄と思はれる、宇野主水雜記の中に可なり詳しい記事がある。即ち、

「廿三日秀吉根來寺へ御陣替、根來寺法師共ハ御人數不越己前ニ悉逃出、寺ヲバ放火アルマジキ由候ツレドモ、時節到來歟、廿三日夜所々ヨリ燒出、大傳法院ノ本堂バカリ殘テ悉燒果了、坊ハ八十バカリ殘ル也、老僧衆五六十人經帷ヲキテ燒跡ヘ出テ秀吉ヘ理ヲ申處ニ、御免アリテ結局不便ナル由ニテ食物等アタヘラレタル也、（中略）大傳法院ノ本堂ニ宇殘ル不思議ト云々、其ワキニ多寶塔殘ル、一切經藏殘ル、但經ヲバ取散也、弘法大師ノ御影木像殘ルト云々、二間計アル大劒殘ル、但堺ヘ買取タル者ナリ、谷々ニ死タル法師モ少々アリ、馬多死、谷ヘ落テ死タル也（下略）」

とあり、また宇野主水日記三月廿三日の條にも、

「秀吉根來寺ニ御陣サルルヨシニ付テ、刑部卿ヲ御本陣ヘ被遣、（中略）今夕日ノ入以前ヨリ根來寺ノ通リ燒煙上テヨリ其夜大燒天カゞヤク也、根來寺放火」

と書かれてゐる。これらの記事から考へると、根來寺の燒亡は秀吉の本意ではなかつたやうでもあり、且つ寺内精兵既になくこれといふ戰爭もなかつたやうであるから、從來傳へられてゐるやうな、大げさな燒討などゝいふのは、當を得ないやうにも考へられる。粉河寺の方は、同雜記に、

「翌廿四日には粉河寺炎上、人數コサヌ前ニ五人シテ燒立タルト云々、自滅也」

とあれば、これも暴徒の放火によつて燒亡したものと思はれる。

雜賀方面にては上方勢の乱入によつて、内輪散々となり、土橋平之亟は船にて土佐にのがれその他の人々は降參した。中の島その他近郷所々兵亂に乘じて起つた暴徒等の放火掠奪によつて、大半潰滅に歸したと傳へられてゐる。

八　高野山の歸順

秀吉尋いで高野山へも兵を進めんとせられたが、山徒靈地の馬蹄にけがされん事を憂ひ、客僧應其の秀吉と旧好あるに賴み、粉河の陣營に到つて哀願せしめ、武事をすてゝ佛事を

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

尊うにすべき旨を誓ったので、秀吉これを許し、四月十日に至つて旧領安堵の命あり、一山こゝに漸く愁眉を開いた。この時の事を紀州御發向記には次のやうに書いてゐる。

「高野山金剛峯寺、是先終無レ背二上意一、不レ忘二柔和之姿一、專二眞言大事一條、尤神妙也、殊彼山者、誠無比靈地、弘法大師遺跡、而諸人所二歸依一也、異朝敬レ之、故以二制札一、全寺領金無二相違一者也、就中金堂破壞幾久、誰人於二末世一修二造此大功一哉、内府大政所殿、爲二逆修一欲レ營二此堂一、米一万石遣レ之、又金堂爲二修理料一三千石之寺領、末代所二新寄進一也。」

九　太田城の水攻

根來、雜賀既に潰滅したが、ひとり太田城に據れるもの未だ歸服しないばかりでなく、上方勢の通路を遮つて弓や鐵砲を打かけたり、兵粮を奪ふなどの狼藉を敢てした。秀吉大に怒つてこれを攻めさせやうとしたが、城は要害堅固で多くの鐵砲をもつてゐる故、急に攻めては味方を損ぜん、土民に對して侍を失ふ事詮なき事であるとて、俄に城の周圍四十八町に亙つて大堤を築かせ、紀の川水を引入れて水攻にしやうとし、領地の分限によつて人數を書立て、何間何間と割付け、堤の外圍には陣屋を立續け、晝夜の分ちなく工事を急がしめた。そして秀吉親ら陣屋廻りをして怠るものはこれを罰し、成績の良いものはこれを賞するなど督勵につとめたので、大名小名競つてこれにあたり、工事着しく進捗した。この間增田右衞門長盛は兵粮奉行を命ぜられ、紀港に居て、須磨、明石、兵庫、西宮、尼崎、堺津等の諸船を以て糧食を運んでこれに供給した。何分この工事に使役した人夫數十萬といはれ、將士亦數萬に及ぶので、一日に米千俵大豆百俵を要したと傳へられてゐる。堤のだん〳〵出來るに從ひ水漸く上つたが、城内にはかねて用意せる横堤あつて、未だ城内を水浸しにするに至らない。そこで盲舟といふものを送り、巧みに色々の攻道具を工夫して、横堤を切崩させたので水漸く城内に入つた。折しも四月中旬に至り降雨連日、紀の川出水甚しく、漸く成らんとした新堤の一部百四十五間計決潰し、その汀深淵をなしてせき止めるすべもない。そこで多くの人夫を督して二三十萬の土俵を造りて淵底に沈め、辛うじてこれを修築した。戸川日記にはこの時の事を次のやうにかいてゐる。

「天正十三年根來攻の時、和泉千石堀に於て備前勢軍功あり、根來寺滅却の後紀州雜賀へ御發向、諸勢丁場を分て長堤を築水攻の節、備前丁場の堤切れ溢出、秀吉公御機嫌損ず、岡豊前守早速御前へ出て、私不念故に堤を切せ申譯には切腹可仕と申上ければ、忽ち御機嫌直り加樣の事は有物なり、早々水を留候へとの上意にて相濟、即時に人夫を掛て元の如くに堤を直す、無程落城に及し也。」

これより先城兵漸く窮し、堤の切れたのを好機とし、蜂須賀彦右衞門正勝、前野將右衞門長泰に賴つて和を求めたが、堤の切れたゝめ許したとあつては下々への聞えもよろしからずとて許されず、新堤成るに及んで、愈手も攻めあぐみし折柄とて、四月廿二日に至つて和議成立し、城内より城主は重だちたるもの五十餘人を斬つて罪を謝し、その他の男女殘らず助命せられ、鐵砲腰刀等は悉く取上げられたるも、農具家具等は全部下げ返さるゝ事と

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

なった。

一〇 落首の事

天正十三年三月廿三日根來寺焼亡のとき、修行者あり。

似合はざる根來法師のうでたてにあはれ弓矢のはぢをかくはん

と一首の狂歌をよんだと、紀州御發向記に出てゐる。

同年四月九日太田城攻圍中、豪雨の爲堤の一部決潰して、備前衆の陣營をつき衆乱せしめた時の狂歌につき、諸書載する所多少の相違がある。川角太閤記には、

「水も過半あがり申時分に、備前之宇喜多八郎殿町場堤きれ申候、其時幽齋狂歌に、

備前かがいくらもおほき其中にやきは堤の大きれぞする

左候處に内より幸と存降參を乞申候」

とあつて、この狂歌を細川幽齋の作と明記してゐる。

然るに、太田水責記には、城中より、

備前ものその身は何としらねども堤や岩や大切ぞする

といふ狂歌を大なる杭に書付けて、堤の切口より流したとあり、これと内容の殆んど變らない、太田城由來並郷土由緒之事といふものには、城中の何某一首の狂歌を板に書付けて寄手の陣へ流しけるとし、

備前ものその身は何かしらねどもつゝみ焼刃で大切ぞする

とあつて、小しばかり文句をかへてゐる。

又、根來焼討太田責細記には、

「城北宇喜多備前守の仕寄場堤幅十五間程切れ、備前勢大半溺死す、狂歌あり、

備前もの身はなまくらか知らねどもつゝみ焼刃で大切れぞする

是に依て城内は水干となり、北の方は御本陣迫白浪滔々と落込みたり」

とあつてその狂歌の文句は各記録まちまちである。これ等のうち最初の作はいふまでもなく川角太閤記のもので、この本の記事は大体實録と見なしてよいものであるから、多分事實であらう。その他のものは皆これから色々と焼直して、單なる揶揄として附會したに過ぎない。この一事から見ても後代にかいれた記録といふものは、隨分いゝ加減のものが多いといふ事がうかがひ知られるし、再檢討を加へる必要も亦こゝに存するのである。

一一 秀吉紀州表在陣中の動靜

秀吉は三月二十一日大阪を出發せられ、四月二十六日大阪へ歸られたのであるが、この一ヶ月餘に亙れる紀州表滯陣中の動靜については、宇野主水記や紀州御發向記等によってその一斑を知る事が出來る。即ち三月二十三日根來方面へ御動座あつて、多分粉河あたりまで本陣を進められたやうに思はれ、翌二十四日には雜賀谷へ御動座、二十五日には紀三井寺その他を見物せられたとある。太田城攻圍中は屢〻陣中御見廻あつて工事の督勵につとめられたやうであり、四月初には陣廻りの途次和歌浦玉津島に詣でられて、

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

打出でゝ玉津島よりながむればみどり立そふ柿引の松

といふ和歌を詠ませられ、皆々佳作なりと感心、時に太平山院主古溪宗陳和尚柳營幕下に參じ、御詠の佳作を祝して左の詩を奉つたとある。

畫工於景末能濃　浦號和歌誰后蹤
神祝吾君玉津島　緑新布引萬年松

尚御滯陣中は新に座敷を設けられ、雅客を延いてしばゝ茶の湯の會などを催されて、陣中明日月の御樂みもあつたやうである。雜賀在陣中どこに居られたとも確かに知り難いが、雜賀落城後「新造土橋構一爲二御幕下一」とあるのと、四月四日には本願寺新旧兩門跡が陣中御見舞として土橋平三亟城内にて秀吉に御見參ともあれば、此處に居られた事とも察せられる。また四月十八日には德川家康の息於義伊といふのが陣中御見舞の爲雜賀へ御越とも書かれてゐる。於義伊は他の本には於義丸ともあり、家康の庶子結城秀康の幼名で、この比人質のやうなものとなつて大阪城に來て居られたらしい。今の處以上の事だけしかわからない。

二　紀南への進擊

これより先秀吉の紀州へ攻め入るや、別軍の將仙石権兵衛秀久、尾藤甚右衛門知定、藤堂與右衛門高虎、青木勘兵衛一矩、杉若越後守等をして水陸兩方より紀南地方へ進擊せしめた。各地の土豪、鄉士等その旗を望み見て、或は潰え散り或は降參し、到る處風靡せざるなしといふ有樣であつた。

三　田邊方面の戰況

その頃日高郡小松原城に湯川中務大輔直春（直光の子）といふものあり、累代この地方に蟠居し、その領地日高、有田、西牟婁の三郡に跨がつて權勢地方に並ぶものなかつた。世々足利氏に屬し、また德川家康ともよかつたと見え、小牧陣の時には雜賀根來の衆と共に兵を和泉に出してゐる。今度仍紫氏の南征にあたり、湯淺の白極氏や和佐の玉置氏等既にこれに内應したが、湯川氏ひとりこれに從はず、或は兵を出して白極氏の居城を攻め、また玉置氏の居城坂の瀨を追崩すなど、抗戰につとめたが、寄手の大軍迫れりとき、城をすてゝ近露に走つて横矢六郎に賴つた。その枝城たる下芳養村の泊の城には家臣林左京進等を置いてこれを守らせた。三月二十八日寄手の勢船にて下芳養に上陸して泊の城に押寄せた。湯川勢防ぎ戰つたが利あらず、その後もしばゝ〳〵この方面にて戰爭があつたらしい。

その頃山本主膳頭康忠は市の瀨村龍松城に據つて抗し、湯川勢亦汐見峠等の嶮を飛んで防ぎ戰ひ、互に勝敗あつた。かくするうち湯川勢は主將直春の病死によつて降參し、山本主膳頭も藤堂高虎の軍と戰つて敗死した。がくて上方勢は杉若越後守を駐めて引上げたが、その後湯川、山本の遺臣等再擧を圖り、泊の城に杉若越後守を攻めたがもろくも敗北し、數ヶ月に亘れる田辺地方の戰亂も、天正十三年七月頃には漸く鎭靜するに至つたものと思はれる。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

50

一四 堀内安房守の歸服

新宮には堀内安房守氏善あり、奥熊野一帯を領有して威名地方を壓してゐた。秀吉の南征にあたつてその抗する事の非なるを知り、衆に先んじて歸順をこうたので、秀吉これを納れて所領安堵を約せられた。

一五 戰亂の慘禍

この兵亂に於て上方勢の過ぐる所、在々所々神社佛閣その他の兵火にかゝるものその數を知らず、紀州の主要なる社寺はこの一擧によつて殆んど潰滅に歸したといつても過言ではない。尤も兵亂に乘じて起つた各地不逞の輩の掠奪放火によれるもの、少くなかつたといふ事も見のがす事は出來ない。

一六 紀州平定

かくして紀州一圓全く平定したので、秀吉はその異父弟大和大納言秀長に紀伊、和泉を加賜せられた。秀長は秀吉の命を受け、岡山の地を相して居城を營み、粟山重晴を城代としてこゝに居らしめた。これが今の和歌山城である。

一七 秀吉高野詣での事

文祿三年二月二十七日秀吉吉野の花見の爲登山、和歌の御催しなどあり、三月三日朝高野山へ登御せられた。これは御母堂大政所御寢福の爲である、青巖寺にて佛事を執行せられ、連歌會、御能などありて、五日に下山せられた。その時の事を駒井日記には次のやうに書かれてゐる。

「三月二日、從吉野太閤樣高野へ御參詣。
太閤樣三日曉高野へ被成御登山、御布施被降覺。
五十石檢校。九拾石大舍利。百石平僧百人。二百石新發意百人。二千石行人二千人。千石木食。百石木食內竪。合三千五百四拾石。
三月六日、藤堂佐渡方より於高野太閤樣御機嫌之樣子申來。去三日高野へ御登山、四日に大政所樣御いはい所にて御法事、御供公家諸大夫何も裝束之由、五日ニ御能、六日に奥院に御入堂、其日御連歌可被成由、七日に堺迄可被成還御由申來。
同日、木下大膳從高野書狀到來。去四日に佛前にて御燒香の由、內陣へ聖門菊亭殿中山日野右衛門督烏井御供之由、法事論議律師經之由、右過候而連歌百韻被成由、奥院へ御參候而こんたう大塔弘法大師五筆共被成御覽由、五日に御能老松井筒皇帝松風被成由。
寺藏主より五日三文に、太閤樣五日未刻兵庫之寺迄被成還御由申來」
紀伊續風土記に「(上略)五日御連歌、同六日御能興行の御催しあり、迅雷の變に遭て止給ふ、即日御下向あり」とあるも、これは駒井日記にある通り五日下山せられたといふのが正しいやうである。また前記藤堂佐渡守の書狀にある五日以後の分は豫定であつて、迅

51

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04064

雷云々の事は駒井日記には見えないが、それが爲豫定を變更して急遽下山せられたといふのが事實であるらしい。

また、この時の御供の衆については、利家夜話に、

「名古屋陣引取候て後年、太閤様、政所様、其外加賀様御手掛衆御同道にて吉野山へ御花見に被成御座、御供の人々は、家康、利家、金森法印、蒲生飛彈守、淺野彈正殿其外御咄之衆御供也、御帰には高野山へ御參詣也」

とあれば、大体の顔ぶれが想像出來やう。

田邊地方に於ける天正兵亂の再檢討

一

從來豊臣氏の紀州征伐のうち、田辺方面の戰記として傳へられてゐるのは大略次のやうになつてゐる。

「天正十三年三月羽柴秀吉大軍を率ゐて紀州へ進入し、根來寺を燒き、雜賀を降し、太田城を水攻にして、紀北一帶茲に平定したので、更に軍を南に進め、四月七日仙石權兵衛、尾藤久右衛門、藤堂與右衛門、蜂須賀彦右衛門、宇野若狹守、青木勘兵衛、杉若越後守等の軍勢水陸兩方より攻來り、湯川直春は小松原城をあけて下芳養村泊の城に移り、更に敗れて龍山に走り、ついで近露に逃れて横矢六郎に頼つた。その時山本主膳頭康忠は市の瀬村龍松城に據つて抗し、湯川勢は汐見峠の險を扼して防ぎ戰ひ、互に勝敗あつたが、七月に至つて本領安堵の約を得て和議成り、杉若越後守を駐めて全軍引あげた。翌十四年二月湯川直春、山本主膳頭等は紀伊の領主大納言秀長の居城たる大和國郡山へ誘き出され、七月十六日に至つて直春は毎殺に遭ひ、主膳頭も亦藤堂與右衛門のために討取られた。この報郷里に傳はるや、湯川、山本の遺臣等相謀つて泊の城に杉若越後守を攻めたが、もろくも敗北して湯川、山本兩氏遂に亡びた」

この物語は地方の古老にも傳へられ、いろ〳〵の本にも書かれてゐて、私もこれまではそれが全部實録であらうとは思はなかつたにしても、大体事實に近いものと考へてゐた。然るにだん〳〵突込んで調べて見ると、それには幾多の矛盾があり、少からぬ間違のある事が明かになつて來た。

二

紀北方面の兵乱については、信據するに足るべき多くの記録が殘されてゐるが、田辺方面に関するものは殆んどないといつてもよい。私の知り得る限りでは、僅に湯川彦右衛門覺書、藤堂家覺書、田辺萬代記、田辺大帳などに散見するに過ぎないやうである。湯川記には可なり詳しい記事があり、從來の戰記は大部分これによつてゐる事がわかる。よく調

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04064

べて見ると、この本の記事は眞偽相半ばするやうで、田辺方面の戰記は餘りにも潤色を加へ過ぎてゐるやうで、そこに再檢討を加へる必要があるのである。

古人は眼光紙背に徹すといふ、面白い語句を殘して呉れたが、史的資料を讀む場合には、特にその必要を痛感する。祖先の武功を傳へやうとして書かれた、何々系譜とか何々覺書などいふものには、殊更に祖先の系圖を立派なものにしたり、敗軍も勝ったやうに、凡人も英雄に仕上げてゐるかもしれないし、面白く讀ませやうとして書かれた軍書などには、幾多の創作が加味されてゐるものと見なければならぬ。私はこの研究をなすにあたり、從來傳へられてゐるが如き史說を證據だてるべく、何らかの正確な文獻がないかと、根氣よくさがしてみた。然るに殘念ながら何一つその資料の見出されないばかりか、却ってそれを否定すべき幾多の確證をにぎり得たのである。こゝに於てか、私は一旦白紙の狀態にかへり、獨自の立場に於てこの兵亂の眞相を明かにしやうと決心した。以下出來るだけの證據をあげて私の信ずる点に向って筆を進めやう。

三

第一、紀北地方を平定してから、軍を紀南へ進めたといふのは當らない。同一の部將が紀南へも攻めて來たと思ふのも間違ってゐる。これは紀北方面ではまだ戰亂のつゞいてゐる間に、別軍をして紀南へ進擊せしめたと見なければならぬ。これを證據だてる爲に、まづこの兵亂の經過を正確な文獻によって書上げて、そこに和歌山縣誌などにかゝれてゐる、四月七日進軍說を固守する場合に、大きな矛盾の生ずる点あるを考究してみたい。

天正十三年三月廿一日　秀吉軍を率ゐて大阪を發す、だもその前日先陣既に泉州へ入る。

同　日　千石堀附近に激戰あり。
同月廿二日　積善寺落城。
同月廿三日　澤城降る。
同　日　紀州内へ進入、別軍早くも根來寺を燒討す。
同　日　雜賀城陷る。
四月十日　高野山に舊領安堵の命あり、
但し同山へ兵を進めてはゐない。
同月廿二日　太田城の圍解く、この攻圍一ヶ月に亘る。
同月廿六日　秀吉大阪へ歸陣せらる。

これ等は紀州方面に關するものであるが、紀南關係のものとしては、宇野主水雜記の中に、

「紀伊國由良寺、天正十三、三月下旬羽柴秀吉諸卒乱入、悉打破畢。」

とあるのと、田邊方面のものでは、田邊町誌の記事によって、次の事だけが判ってゐる。

天正十三年乙酉三月より七月迄田辺大亂。（田辺大限）

天正十三年湯川の亂あり、杉若越後守、仙石權兵衛等、三月廿八日芳養泊の城に入る。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

（田辺萬代記）

以上彼此對照して見ると、四月七日進軍説は全く根據を失ふ事になる。尤もこの四月七日といふには、他に何か理由あるものと見え、豊公紀州御發向記の末尾に、異本にありとして、「四月七日進軍熊野」、九日還御大阪城」の語句を附記してゐる。この文句から考へれば、秀吉自身が督軍の爲、熊野へ來られたともとれるが、九日還御はいかにも早きにすぎて、今のところ何の事か判断しかねる。兎も角三月廿八日泊の城に入ったのは、事實と思はれるから、四月七日進軍説は理屈に合はない事になる。

次にあぐべき事は、紀北征討に從った部將と、紀南進擊の部將とは全然別の人であらうといふ事である。今確實と思はれる文献によつて、主なる部將の名を拾ひあげてみると、泉州、紀北の戰に參加してゐるのは、副將格の羽柴秀長、羽柴秀次を始めとし、細川與一郎忠興、蒲生忠三郎氏郷、中川藤兵衛秀政、高山右近重友（友祥ともあり）、堀久太郎秀政、増田右衛門長盛、筒井伊賀守定次、宇喜多八郎秀家、長谷川藤五郎秀一、蜂須賀彦右衛門正勝、前野將右衛門長泰などである。

田邊方面のものは、田辺萬代記、湯川彦右衛門覺書、藤堂家覺書に見えるだけで、それ等によつて、仙石權兵衛秀久、青木勘兵衛一矩（紀伊守と號す）、藤堂與右衛門高虎（佐渡守後和泉守）、杉若越後守、尾藤甚右衛門知定（下野守と號す光房ともあり）の五人の名前だけがわかる。

豊公紀州御發向記に、「其間（太田城攻国中のこと）中村孫平次、仙石權兵衛尉、九鬼右馬允為大將、小西、石井、梶原等定舟奉行、超由良門那智海、逆浪附天、卒風捲砂、凌此大難、

遍寄熊野浦」とあつて、これ等の人々の南征せられた事も判るが、仙石權兵衛以外の人々は、田辺へ上陸せられたか、熊野まで行かれたのか、今知るよしもない。中村孫平次一氏の南征せられた事は、宇野主水日記の次の記事によつても確められる。

「四月十三日中村孫平へ御音信、小袖三馬樽三、紀州奥郡ニ先懸以來在陣中ニ付テ被遣之御書アリ、使番衆刑部卿添状」

この外に、從來の戰記では、蜂須賀彦右衛門と宇野若狹守も來た事になつてゐる。宇野若狹守は田辺へ來てゐるかも知れないが、まだ確かな記録が見あたらない。蜂須賀彦右衛門正勝が來たといふのは多分間違であらう。この人は前野將右衛門長泰と共に、太田城降參の時にもその局に當つてゐるから、田辺へは來てゐまいと私は推断したい。或は彦右衛門の子の小六家政の事でないかと思はれるが、蜂須賀家記には何も書かれてゐない。

四

第二には、この兵亂が二ヶ年に亘つたといふのも疑はしい点といひたい。これにも幾多の證據がある。最も確證となるのは、現地田辺に於ける實録と思はれるものに、「三月より七月まで田辺大乱」とある事である。次には天正十三年十月大村由己撰にかゝる四國御發向記に、仙石權兵衛、尾藤甚右衛門、蜂須賀父子などの名の出て居る事である。尤も藤堂家覺書に、

「紀伊國」揆大將山本のなにがし、湯川直晴と申者以上二人に而御座候、大納言殿より討

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

手は、青木紀伊守、尾藤下野、杉若越後、和泉様右之衆度々の御働に候得共、二三年之間敵さゝへ居申候」

とあり、一應は兵乱二ヶ年説を裏書するかの感もするが、これもその次項の記事に、

「四國阿波國木津の城、同一の宮取まき之刻、夜中に和泉様やぐら下へ御着被成御座候處、敵ついて出、御鑓をあはさせられ、相手は長曽我部内横山隼人と申者に而御座候」

とあって、前項の「二三年之間敵さゝへ居申候」とあるのと自家撞着の失態を演じてゐる。このニ三年三間とあるのは、恐らくニ三ヶ月之間の誤りであらう、それなれば能く筋道が立って聞える。阿波國木津、一の宮の戰は、天正十三年五六月頃の事と思はれるから、これ等の人々はその頃既に四國で轉戰してゐた事がわかる。

湯川、山本の遺臣等の泊の城を攻めたのは事實としてよいが、これも天正十四年七月の事ではなく、やはり天正十三年七月頃の出來事でなければならない。かく推斷する爲には、その頃の田辺の記録によって書かれたと思はれる、湯川退軒翁の遺著田辺泊革小史に、

「天正十三年て再杉若越後守初テ芳養泊城ニ移ル、此年和歌山太田陣ノ役アリ、三月ヨリ七月ニ至テ田辺地方騒擾ス、湯川、山本の兩軍は天正十三年五月頃には既に潰滅したのも引證しておく。想ふに、湯川、山本の兩軍が駐って守備してゐたのを、兩軍の殘黨が再擧を圖って攻め寄せたが敗北に終り、數ヶ月に亙った戰乱も同年七月頃には鎮靜に歸したものとみてよい。

五

最後に、天正十四年七月湯川中務大輔直春、山本主膳頭康忠等が、郡山へ誘致謀殺せられたといふ、劇的場面にもメスを加へねばならぬ事になってくる。湯川彦右衛門覺書に、

「紀伊國中太閤へ一味仕り、湯川敵ニ仕候ニ付、湯川モ日高郡小松原ノ城ヲ明ケ、直春モ熊野ノ奥三バン（近露のこと）ト云所へ立退候（中略）下甲（下芳養のこと）ニハ林左京進ト申者ヲ常ニ指置候、太閤方ヨリハ青木民部少輔、仙石権兵衛其外ノ大名分ノ衆、舟ニテ下早ヘ上リ候時、湯川三バンヨリ押寄合戰仕候、太閤方ニ松浦喜八郎ト申者ト、湯川家來ニ池田帶刀ト云者ト鑓ヲ合セ、其後鑓ヲ捨テ組討ニ成申候、喜八郎ハ大男、帶刀ハ小男ニテ喜八郎ニ組ツセラレ頭ヲトラレ候處ヲ、我等母方ノ祖父平井治部左衛門掛合セ、喜八郎ヲ引タラシ喜八郎頭ヲ取ツテ帶刀ニヤリ候ヘバ、帶刀ハ早ヤ其内ニ右ノカイナヲ討オトサレ（中略）帶刀モ相果候（中略）扨直春モ其砌無程病氣ニテ相果被申候」

とあり、これによって下芳養合戰のアウトラインも判るし、明かに直春病死とあれば、毒殺云々の疑念をさしはさむ餘地は少しもない。想ふに直春の病死は下芳養敗戰後幾程もない時分のことで、主將を失へる湯川勢は意氣沮喪して降參したものであらう。尚、同書に、

「太閤紀伊國へ御入候テ以後、直春ノ子湯川太郎五郎五郎幼少ニテ居申候ヲ、太閤ヨリ被召出、知行三千五百石被下候、太閤ノ弟大和大納言

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

へ御付ケ被成候」

とあるのを見ても、直春毒殺説否定の傍證とならう。何となれば、これは降参である故、その遺児がかゝる恩命に浴したものと見る事が出来るので、若し毒殺であつたならば、仇敵とつけねらはるべき危険分子を、側近く召抱へるといふことはあり得ないと思ふ。

一方、山本主膳頭の最期はどうなつたかと調べて見ると、それは藤堂家覺書に、

「湯川はかうさんいたし候、山本は和泉様武略を以て御うちはたし、其外山本がせいきりつまり甲候事」

三百計速御成敗被成、其後一揆し

とあれは、これも和睦の翌年郡山までいつて、討たれたとする事は不當であつて、やはり天正十三年四五月頃に市の瀬附近の合戦にて敗死せられたものと見るべきであらう。

序に湯川彦右衛門覺書の記事の信用程度について附記しておく。同覺書中に彦右衛門の親作乎といふのが、十六歳でこの兵乱に參加し、母方の祖父平井治部左衛門といふ剛の者の高名手柄した事をも書いてゐる位ゆゑ、それらの人々からの聞覺を書とめたものと見るべきで、後世の作である糸圖がきや、軍書などよりは遙に史的價値の勝れるものと判定してよい。

六

田辺地方に於ける天正兵乱について、私が今日までの研究によつて知り得た眞相と考へられるものは、大体以上述べたことにて盡きる。しばゝ申した通り、これに関する信ずべき資料は極めてすくない。この乏しい資料と他の史實による側面的考察とによつて、大膽に率直に縦横の批判を下して見た。これによつてこの兵乱に関する從來の説を根柢から覆すやうの結果となつたのである。

豊公南征に關する重要なる古文書

その後手に入つた豊公遺文といふ本の中に、次のやうな重要な古文書のある事を知つた。

×

急度申候、去年以來、根来悪黨、雜賀一揆原相語、對二秀吉一慮外候條、爲二成敗一、去廿一日出馬候之處、自二雜賀根來一、泉州岸和田表構レ城相防之處、押詰、則小山田中城両城、中剋責崩、一人も不レ殘、根来雜賀奴原、被レ刎レ首候、明候城事、畠中積谷（善力）寺佐野頭上六ヶ城、令二退散一候間、廿三日に不レ継息根來寺へ押進候處、山々に城を構、雖二相踏一、右責二敵城一におゐて、用にも立候得共、討レ敵候に付而、少も不二相拘一北散候間、根來寺不レ殘令二放火一、廿四日に雜賀表へ被レ進、上篇平丞城先手之者共取巻候處に、夜落に行方不レ知被レ成候、此表依レ爲二多人數一、手を分、千石権兵衛尉、中村孫平次、小西彌九郎其他人數、至二湯川館一差遣候處、畠山式部太輔、村上六右衛門親子

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04064

三人、柏原父子、根來寺法師蓮藏院以下、數多討果、畠山居城戸屋城乘捕候、三日之内に泉州紀州佐ニ存分」候、然者湯川一城相抱候條、召取巻、秀吉儀は紀湊に拵し城、國中置目等、為し可ニ申附一、可し令ニ逗留一覺悟候、猶追々可し申候、謹言

（天正十三年）三月二十五日　秀吉　華押

小早川左衛門佐殿

この文書は、豊公が紀州表の陣中から、小早川隆景に與へて、紀州討伐の經過を報じたもので、泉州諸城の名その他に二三讀下しにくい所あるも、これによって次の諸点が明かになつた。

一　宇野主水雜記には、根來寺の燒却は秀吉の本意でなかつたやうになつてゐるが、之には明かに「根來寺不」殘令ニ放火一」とある事。

二　「此表依し爲ニ多人數一、手を分、千石權兵衛尉、中村孫平次、小西彌九郎其外人數、至ニ湯川館一差遣候云々」とある事によって、紀南進撃の將卒と紀北征討の將卒とは全然別個の人々であつた事も確認せられ、中村一氏や小西行長等の南征せられたことの明かになつた事。

三　有田方面の戰に於て、畠山式部太輔、村上六右衛門等の戰死せられた事もわかり、鳥屋城の落城は三月廿三四日頃と推定し得る事。

×

今一つの文書は、小牧陣の時、紀州勢が泉州に攻め入つた後に、黒田長政に與へられた左のやうな感狀である。

今度到ニ和泉表一、根來、雜賀、湯の川始、罷出候處、及ニ一戰一突崩、首數多討取、無ニ比類一候、為ニ褒美一、貳千石　所付別紙吉之宛行宛、全可ニ領知一狀如し件

天正十三

卯月十二日　秀吉　華押

黒田吉兵衛尉殿

これは黒田家譜にも載つてゐて、その時長政僅に十七歳であつたが奮戰能く大敵を擊退したもので、この文書によつて湯川直春の軍が根來、雜賀の衆と共に和泉に攻入つた事が確認せられるわけである。湯川彡右衛門覺書に、

「直春代ニハ家康樣トモ弓箭契約仕リ、家康樣ヨリ馬ヲ湯川ニ被下候ヘハ、直春ヨリ鷹ヲ進上仕タル由聞傳へ候」

とあるのも、事實と推定する事が出來るし、從つて家康と直春と修交あつた事などもわかるのである。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

杉若越後守

一　田邊と縁故の深い人

杉若越後守は羽柴大納言秀長の家臣であつて、天正十三年三月その命を受けて、仙石秀久、藤堂高虎、尾藤知定、青木一矩等と共に、紀南進撃の部將として來り、乱平ぎても駐つて田辺城代に任ぜられたもので、前後十六年間に亘つて口熊野地方の統治に當られた。從つて田辺地方とは誠に縁故の深い人であるが、惜しいかなその經歴などはあまりはつきりせず、田辺町誌にも「杉若越後守、同主殿頭父子は、其生國通稱實名等を知り得ず、又其經歴等も分らぬ」と書かれてゐる位である。これは比較的小身であつた爲か、或は田辺のやうな僻地に居て、その後の花々しい戰場に出なかつた爲であるかも知れない。

二　從來の記錄に現れた越後守の事蹟

紀伊續風土記田辺城下の條に、

「天正年中湯川ノ亡ブルヤ、大和大納言ヲハ王寺砦（所謂上野山城で今の田辺町元町）ニ移シテ此ニ居ル、慶長五年關ヶ原役ニ新宮堀内安房守等ヲ蒙リ堀内氏ヲ討ス、房州逐電ス、越後守新宮在陣ノ内、淺野氏封ヲ本國ニ受ケ、淺野左衛門佐八王子城代タリ、越後守舟ニテ還リ田辺ノ凩浦ニ一泊シ逐電ス云々」

とあり、私の知る限りではこれが一ばん古い記錄のやうである。田辺方面にも正確な資料は殘つてゐないが、小幡儀太郎翁の遺著紀伊戰國列傳や和歌山縣誌、田辺町誌などには、多少の異同はありとしても、大体次のやうな事蹟をあげてゐる。

一　田辺地方平定後、芳養の泊城にゐたが、天正十八年上野山城を築いてこゝに移つたといふこと。

二　文祿元年の朝鮮役には、越後守の子主殿頭が六百五十人の部下を率ひて渡海したといふこと。

三　慶長三年九月越後守不在中、日高郡山路に土民の一揆起り、一時田辺地方大騒ぎしたといふこと。

四　慶長五庚子年關ヶ原役には、徳川氏の命により、和歌山の桑山一晴と共に、西軍に加擔せる堀内安房守を新宮に攻めてこれを破り、その新宮在陣中に、淺野左京大夫幸長紀伊一國に封ぜられ、その家臣淺野左衛門佐が田辺城代となつたときいて、急ぎ田辺に歸り、家族を連れて田辺を去つたといふこと等。

三　朝鮮の役と越後守

杉若氏が新宮の堀内氏和歌山の桑山氏等と共に、水軍の將として朝鮮に渡り、相當の手柄を立てたといふのは事實であらう。その部下六百五十人とあるは、太田和泉守の天正

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

記に、

朝鮮國進發の人數つもり肥前の國名護屋在陣の衆

朝鮮國船手の勢

千五百人　九鬼大隅守　二千人　藤堂佐渡守
千五百人　脇阪中書　七百五十人　加藤左馬助
七百人　來島兄弟　二百五十人　菅平右衛門
千人　桑山小藤太　八百五十人　堀内安房守
同小猫太
六百五十人　杉若傳三郎

以上　九千二百人

とあるのによつたものと思はれる。尤もこの六百五十人といふ數は、多分豫定數であつたやうで、實數は或はそれよりも少なかつたのかも知れない。

伴信友の中外經緯傳といふ本には、武家古文書集所載として「文祿元年秀吉公朝鮮征伐之備列」といふ條と、「朝鮮國御仕置之城之覺」といふ條に、それ〳〵の人數を列記した中に、兩方ともに「百八十五人杉若傳三郎」となつてゐて、餘りにも人數の少いのは、數箇隊に分屬せしめたものかも知れない。人數の點は兎も角として、この杉若傳三郎といふのが、從來傳へられてゐる、杉若主殿頭といふのと同一人である事は明かであつて、主殿頭の通稱の傳三郎といふ事が判るのである。

四　越後守と主殿介とは同一人ならん

日下寛編の豊公遺文といふ本に、「太閤様御代御肥分帳（慶長二年比）」と題して、その時分の大小名の祿高を列記した中に、

二萬七千石　堀内安房守
一萬九千石　杉谷（越後主殿介）

といふのがある。この杉谷とあるは杉若の誤記なる事は明かであつて、越後と割書した点は大に注意を要する。これは見やうによつては父子の名を併記したものと考へられぬでもないが、この比越後守が退隱してその子に跡をつがせてゐたとも思はれぬから、私はこれを越後守と主殿介とを同一人であらうと解釋したい。さすればこれまで越後守の子として（實は主殿介が正しい）ゐた主殿頭とは、結局親子ではなくて、越後守その人の異称であるといふ事になる。これが單に私だけの臆説かと思つてゐたら、近世日本國民史朝鮮役の年表に、

「杉若傳三郎、主殿頭といふ、秀吉に仕ふ、天正十四年紀州田辺城三万石に封ぜらる。文祿征外の軍に從ふ、慶長二年山地一揆を平げ、又庚子の際新宮堀内安房をも攻めしが、戰後除封」

とあつて、私の臆斷と合致してゐる。尤もこの記事中山路一揆を慶長二年とせるも、これは田辺町誌に、

「田辺大帳慶長三戊戌ノ條ニ云、山地陣、労養堂之庭合戰、於労養小川與市（一揆の巨魁）秋津田中三吉討ル（討取るが）労養秋津山地へ入込」

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

とあるし、筆者不明の山地一揆の事といふのにも、慶長三年九月より十一月迄の出來事となつてゐるから、慶長三年とする方がよいやうである。また田辺城三万石云々とあるのもどうであらうか、尤も安藤氏の祿高は三万八千餘石であるから、或は杉若氏時代にも實際は三万石位はあつたかも知れぬが、表向はやはり一万九千石とするのを正しいと見なければならぬ。

五　關ヶ原役と越後守

關ヶ原役のとき、杉若越後守は關東方となり、和歌山の桑山一晴と協力して堀内安房守を攻めたといふ事は、これまで殆んど定説のやうに考へられてゐたやうであるが、私は久しい以前からこれに疑念を挾んでゐた。

堀内安房守は關ヶ原の役起るや、西軍に黨し兵を伊勢まで出した時、西軍敗北と聞いて新宮に帰つたといふのは事實であらうし、桑山一晴の新宮を攻めたのも亦事實と考へられるが、杉若越後守が桑山一晴と行動を共にしたといふ説には、どうも首肯出來ない点があり、腑に落ちない所があると思つてゐた。

杉若越後守が果して關東方であり、徳川氏の為に手柄を立てゝゐるならば、何を苦んで浅野左衛門佐の田辺城代になつたときいて、倉皇として田辺へ還り、夙浦に假宿して夜逃同様に田辺を去らねばならなかつたか、これ大なる疑点であると考へてゐた。

關ヶ原役後の處置方針としては、微罪は大抵舊領安堵となつてゐるやうであるが、廢絶

錄の慶長五年詰家没收之部に、

二万七千石　紀伊新宮城堀内安房守氏善　關ヶ原役畢て後逃亡

一万九千石　紀伊田辺城　杉若主殿助

とあつて、杉若主殿助の方には除封の理由を附記してないが、廢絶といふ事は最も重い懲罰であつて、果して關東方であつたならば、何故にこのやうな憂目に遭つたのか、どうしてもその理由は判らないと考へてゐた。

かういふ疑念が去らない内、私はいろ〳〵の文献をあさつて、その眞相を明かにしたいと思つてゐた。幸な事には、參謀本部編纂の日本戰史を見るに至つて、こゝに初めてその疑念の解消を見る事が出來たやうに思ふ。

六　越後守は大阪方なり

日本戰史關原役附表中、兩黨分屬圖には、和歌山（二万石）桑山一晴を東黨とし、田辺（一万九千石）杉谷氏宗と新宮（二万七千石）堀内氏善の兩者を西黨としてゐる。封邑革新表には、封土加賜之部に、

三斗九万五千石紀伊和歌山（舊封地甲斐府中二十一万七千石）　淺野幸長

とあり、封土依舊之部には、

二　万　石　大和布施（紀伊和歌山ヨリ轉ズ）　桑山一晴

と出てゐる。尤も恩榮錄といふ本には、淺野幸長の祿高三十七万六千石とあつて多少の違

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

ひあり、本領安堵として「二万石紀州和歌山桑山修理亮一晴」とあるから、桑山一晴の方は一旦本領安堵となつて後、移封せられたものらしい。又日本戦史、所領没収之部には、

二万七千石　紀伊新宮　堀内氏善
一万九千石　紀伊田辺　杉谷氏宗

となつてゐる。この杉谷氏宗とあるは、杉若氏宗の誤記である事はいふまでもなく、恐らく豊公遺文と同様の錯誤に由るものであらう。

尚同戦史を精讀してみると、両軍計畫及措置の條に、西軍の在阪諸將士の大阪詰口分擔を書いたうちに、玉造口〔多賀出雲守秀家〕〔杉谷主殿助氏宗〕とあり、また京極高次が大津城に據つて東軍に内應した時、その攻手詰將の中に桑山一晴、杉谷傳三の名が見える。この杉谷傳三とあるのは杉若傳三郎氏宗の事と思はれるから、越後守は明かに西軍に參加してゐたことになる。たゞ決定しかねるのは、東軍の記事中に割註として「後一晴ハ田辺ノ城主杉谷氏宗ト共ニ新宮ノ城主堀内氏善ヲ攻メシヨリ降セリ」とある一点であるが、これは恐らく既記のやうな俗説を誤つて取入れたものであらう。私はいろ〳〵の方面から考察して、越後守は大阪方であつたらうと認定したい。何とかしてこれに関するもつと正確な史料を見たいものである。

次にもう一つ疑問と思はれるのは、和歌山の桑山一晴の事であるが、これは最初西軍に屬して、大津攻手の勢に加つてゐたものを、この戦役には特に多かつた他の裏切り者と同様、中途から東軍に内應し、新宮に堀内安房守を攻めたものと推定すれば、東黨としてゐるのに些の不思議もない。前記封邑革新表中に舊祿高のまゝとはいへ、大和布施へ移された事になつてゐるのは、それは徳川氏が大阪に備へる必要上、淺野幸長の如き有力者を紀伊に封じた結果に由ることはいふまでもないが、また左邊の意味も含まれてゐたものと考へられぬ事もない。

七　判明した越後守の實名其の他

以上縷述した事がらによつて、私の推斷した通り、杉若越後守と主殿介氏宗とが同一人であり、「杉若越後守は、通稱傳三郎、名は氏宗、また主殿介（助ともあり）」といふ。

となるのである。また紀伊戦國列傳には、

「杉若主水ハ豊臣氏ノ將ナリ、天正十三年豊臣氏ノ來伐スルヤ、其將師ニ加ハリ、熊野ニ有功タリ、故ヲ以テ撤兵後遂ニ泊山城ニ鎮セリ、越後守トナレリ」とあれば、主水の異稱もあつたやうに思はれるが、その出典は明かでない。

又、紀伊續風土記古文書之部、三栖村眞砂文書に、杉若越後守宛のもの二通あつて、一は紀伊守より杉越州様とし、他は長束正家、増田長盛、徳善玄以三人から出したもので杉若越後入道殿とあれば、これによつて入道せられてゐたといふ事も察せられるが、その法名などは傳へられてゐない。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

八　餘　録

最後に私の所懷の一端を述べてみたい。越後守と同じく紀南へ來た、藤堂、仙石、尾藤、青木の人々は、その後幾度か花々しい戰場に馳走して、その赫々たる武名は千載史乘を飾つてゐる、誠に幸運な人達といはねばならない。

これに反して杉若越後守に於ては、僅に朝鮮役水師の一員として、その名を録せられるに止まり、その頃の戰記には何一つその武功の傳へられてゐるものはない。これは一面から言へば、在任十六年間、田辺のやうな片田舎に在つて、地方の鎭治にのみ專念してゐた爲とも想像する事が出來やう。然るに不幸にして、その治績として傳へられるものは殆んどないといつてよい。これは徳川幕府に於て、徳川氏にとつて都合の悪い資料は、故らに滅却したといふ事も聞いてゐるから、そのためによるのかも知れない。何れにしても不運な武將であつたといふ事が出來る。

豊公の如き蓋世の英雄でも、その命數は如何ともする事が出來ない。慶長三年八月十八日六十三歳の天壽を以て、伏見城頭一片の露と消えられてから僅に二星霜、その切々たる寄託に背き、幼弱の君主を捨てゝ、徳川氏の走狗となつた、豊家重恩の武將の少くなかつた時代に於て、その恩義を忘れず、敢然起つて西軍に黨し、一敗地に塗れて廢絶の運命を招來したものとすれば、その操守の固かりしを想ふべく、自己の信念に殉じたものであつて、當人としては寧ろ武人の本懷とした事であらう。

然るに何等の皮肉ぞや、豊臣氏の恩顧に背いたものとさげすまれ、東軍の爲に武功を樹

てながら、而もその征戰中、自己の除封せられた事を聞き、同章狼狽田辺に還り、家族諸兵逐電して、その之く所を知らずと、蕭條たるその末路をさへ傳へられてゐるのである。その哀むべき運命に想到しては、坐ろに同情の念に堪へぬものがある。

湯川記を讀む

一

かねて見たいと渇望してゐた湯川記といふ本を、森彦太郎氏の好意によつて借覽する事が出來た。この恩借の本には、紀州地士覺、樫井合戰、山地一揆の事などをも併録せられ、天保三年の傳寫にかゝるもので、私にとつては何れも非常に有益な參考となつた事を深く感謝する次第である。湯川記の方は筆者も著作の年代も判らぬが、その文体などから考へて、私は徳川中期以降のものでないかと思つてゐる。その内容は、

湯川先祖の事
湯川民部少輔直光教興寺にて討死の事
秀吉公湯川山本退治合戰の事
湯川山本殺害の事

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

泊城責の事

湯川系圖

の六項に分れ、そのうち田辺方面の戰記は大体これまで他の本で見たものと大同小異であって可なり委しく書かれてゐる。所が和歌山縣誌などにある四月七日進軍といふやうな意味の語句はどこにも見當らない。或は湯川記といふものには他に異本があるのかも知れない。

二

湯川氏の先祖については、湯川記には大要「甲斐源氏の武田三郎といふ弓箭の達人が、ある人の讒言によって勅勘を蒙り、熊野湯川に遠流せられたが、その頃熊野往還に出沒して熊野詣の旅人を惱してゐた盜賊を平げた功によって、年妻一郎を賜はり芳養の内梅にゐた。その後湯川彌太郎といふもの、代に至り、足利方となって有田、日高、牟婁の三郡の内を賜はり、紀州のはた頭として小松原城に居た」といふ事になってゐるが、湯川彦右衛門覺書には大略「甲斐源氏の武田に三人の子あり、上の二人は本妻の腹で第三子のみ後腹の子であった。昔は國々の守護より禁中へ三年づゝ王番の勤として詰めてゐたが、武田の當番の時嫡子太郎病氣の為、その代番として次男が登るべきを、繼母の計によって三男を代番に登せ、その褒美として三男に若狹の國を賜はったので、次男は不滿に思って甲斐を去り、熊野の内湯川といふ處に居住し、これが湯川の先祖となった」としてゐる。この兩說何れが眞實であるか判らない。實際昔の豪族のうちには勝手に系圖を作って、先祖を立派なものにして自家に箔をつけやうとしたのが隨分あったやうに聞くから、遠い昔の系圖などさう確かに判らぬといふのが本當かも知れない。

三

湯川直光は畠山高政を援けて兵を和泉に出し、永祿五年三月久米田の戰に於て、三好修理大夫長慶の弟實休（義賢又は之慶といふ）を討とり、それより倫理大夫がたてこもれる飯盛城を包圍したが、城堅くして拔く能はず、越えて五月その弟攝津守冬康等と河内教興寺にて戰ひ、一族郎黨共に壯烈な討死を遂げたといふ事になってゐる。これは細川兩家記や足利季世記のうち久米田軍記といふものに、大同小異の記事があり、他に異說もなければ大体實錄に近いものとみてよいであらう。

四

紀州地士覺といふのも筆者は判らないが、末尾に元祿十三年辰正月大吉日とあって、その頃に出來たものなる事が判る。無論湯川記とは別人の筆になったもので、その書振りも確かで信ずべき記事多く非常に面白い本である。そのうち湯川氏については、

「日高郡湯川居城は小松原、領地は日高郡土生村より下の浦里、并海士郡の内衣奈、由良筋、在田郡廣辺にて御座候、秀吉公當國入來の時引受可申覺悟仕候へ共、一戰に

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

も不及室郡近露村迫退下申候、近露迫退候刻も合戦御座候由、其後室郡より牛勢を遣、日高郡南部辺にて節々合戦御座候へ共、後は畧に罷成和州秀長公へ罷出三千石取罷在候處、大枡御陣の時西方に罷在候ニ付、長より浪人仕浅野紀伊守殿へ七百石にて在附申候、名者湯川丹波守と申候、只今廣島にて相果候て知行減り其子跡立候由」とあつて、丹波守の父直春が降参したとも毒害せられたとも書いてなく、和睦したのも大和大納言に仕へたのも丹波守のやうになつてゐるから、私の推断の通り直春の病死後降参したとするのが妥當な見方であらう。

五

湯川丹波守の名は、湯川記にも紀州地士覚にも見えず、湯川彦右衛門覚書には太郎五郎となつてゐるが、宇野主水日記の天正十一年の條に「十一月十八日御書ノ御日付也」と脇書して、

「紀伊國奥郡湯川中務大輔直春此比御無音也、泉州御出ニ付御音信ナサルヽ也、當年頭之祝儀一腰千疋、息次郎太郎元服之祝儀鳥目又百疋、此元服者去年之時分也、又、次郎太郎へ御書一腰五百疋、元服之とあるゆゑ、この次郎太郎が後に丹波守といったのなら、或は次郎太郎といふ方が正しいのかも知れない。また、湯川系圖中に「中務少輔直春、兵部少輔とも有」としてゐるも、これは中務大輔とする事の正しいことも判る。

六

紀州地士覚には、山本主膳頭については、

「室郡一の瀬には山本と申者居申候、是も今高三千石の領主にて御座候、是は日高湯川為には聟、玉置が為には従弟にて御座候、秀吉公當國へ入來の時御敵申、領内へ引籠居申候を、藤堂和泉守殿だましよせ、那賀郡粉川にて腹切せ申候由承候、其子孫一人殘、後に越前少將樣へ罷出、山本次兵衛と申候て、知行千石計取居申候、是も唯今伊豫守樣へ付候で居申候も、又何方へ參候も不存候」

とあり、こんな噂が既にこの時分からあつたといふ事も判る、私にはまだその頃藤堂高虎が粉河城主であつたといふ確かな文献を見た事もないし、湯川記の記事は餘りにも芝居じみてゐて私には信じられない。山本主膳頭切腹云々と同じやうな説が雑賀の鈴木佐太夫にもあつたと見え、太田水責記追加の記事中に「雑賀城主鈴木左太夫なり、信長公落之、鈴木は粉河にて切腹、藤堂與右衛門高虎智謀にて如此と云」とあり。紀伊續風土記にはこれが秀吉雑賀征伐の時の出來事となつてゐて、山本主膳頭の事も之等のものと混同せられてゐるのかも知れない。若し湯川直春や山本主膳頭等が死亡當時建てられた墓碑でも何處かで發見せられたら、茲に最後の斷案を下す事出來るのであるが、まだそのやうな事は聞いた事もない。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

佐久間信盛謫居の地

佐久間右衛門信盛とその子甚九郎正勝は、共に織田信長の世臣であつて、數次の合戰に軍功の少くなかつたものであるが、天正八年八月信長の不興を蒙つて、遠國へ退去を命ぜられ、止むなく一旦高野山へ上つて剃髮、此處にても不可叶との御詫にて、熊野の奥へ落行き、信盛は同十年正月十六日その地にて病死し、甚九郎は赦免になつたといふ事になつてゐる。

紀伊續風土記高野之部には「信盛は同（天正八年）八月耒遁、剃髮して桂嚴と號す。初め相浦に住し、後十津川武藏村にて夭年を終る」と出てゐるし、多聞院日記天正九年八月十九日の條に、「佐久間トツ川ノ湯ニテ死付」とあつて、信盛終焉の地は熊野の奥の十津川といふ事になる。多聞院日記は當時の實錄であるから、佐久間とあるのが信盛の事とすれば、佐久間軍記その他の諸書に、天正十年正月十六日としたのは、恐らく、信長公記の

この天正十年正月十六日　先年佐久間右衛門父子蒙御勘當致他國、紀伊國熊野奥にて病死仕候、被不便に思食候歟、子息甚九郎事國之安堵御赦免之儀、被仰出云々」

とあるによつたものと考へられるが、この記事をよく吟味するとこれは病死の年月を指したものではなく、甚九郎赦免の時を示したものと見る事が出來るので、多分天正九年八月

死亡といふのが事實であらう。

處が爰に檢討を要するのは、紀伊續風土記所載の次の古文書である。

謹令言上候、抑我等身之事不慮之依流罪、自去年寒川山居仕行儀幸之條、歸國之儀偏御神慮奉仰之上、早速信長江致出頭從前前彌成立申如存分於本意者、當宮一社爲私造作仕立、寒川與申談忝末代不可存疎略者也、仍願狀如件

天正九年霜月吉日　　佐久間甚九郎

榮

この願文には文意不明の点あつて、赦免を祈願したものか、或は歸參が叶つた御禮のものか、はつきり解しかねる所もあるが、「自去年寒川山居」とあるゆゑ、天正八年より佐久間父子がこの地方に蟄居してゐた事は明かである。また願主として佐久間甚九郎と併記せる榮といふのは、右衛門信盛の事とも思はれないから、その頃信盛は既に死亡してゐたといふ事も想像にかたくない。恐らく信盛は寒川謫居中病氣に罹り、十津川の湯にて卒去したものであらう。志士清談といふものに、

「佐久間父子堺ノ商人ト相親ミテ、茶ヲ嗜ミ遊ヲ好ミ弓矢ノ道ヲ廢タル罪ヲ怒テ、獨夫トナシテ高野山ニ放逐ス。信盛之ヲ憂ニテ臥寐ニモ忘ルヽ事不能、天正十年病テ死ス。其後甚九郎ハ赦レテ信忠ニ仕ヘ、信長、信忠弑ニ遇フテヨリ名ヲ不勘ト更ム」

と出てゐる。參考の爲抄錄しておく。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

大阪の役と紀州

一　豊臣氏の末路

慶長三年八月豊太閤薨去の後は、その遺命によって、徳川家康、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝の所謂五大老が、秀頼に代って後事を監理した。ところが利家の卒去後は家康の威望のみ断然高く、百般の政務は殆んどその意のまゝに行はれた。秀頼側近の人々の家康に対する敵視と反感は、日を逐って甚しくなるばかりであつた。こゝに於て反家康党の巨頭石田三成は、上杉景勝、佐竹義宣等と謀って、家康を除かんとしたが、慶長五年九月の関ヶ原の決戦は、三成等の企図を尽く画餅に帰せしめたばかりでなく、戦後諸大名の論功行賞は家康の巧妙な術策によって行はれ、益に徳川氏覇権の基礎を決定的のものとしてしまった。

かくて慶長八年二月には家康は征夷大将軍に任ぜられて、豊臣氏の政権回復の一縷の望も絶え果てた。剰へ慶長十六年六月には豊家の柱石たりし加藤清正は病死し、同十九年十月には方広寺の鐘銘のもつれより、徳川、豊臣両者の調停に奔走してゐた、片桐且元も攝津茨木に退いたので、両者の関係は愛に悪化の一路を驀進し、十一月には所謂冬の陣を起して、両軍各所に衝突するに至ったが、西軍振はず、十二月大阪方にとって不利な条件の下に和議を結ぶの外なかった。併し一たび収った干戈も徳川方の重なる圧迫に堪へかねた、大阪方をしてまたもや開戦を決意せしめた。翌元和元年四月夏の陣の勃発となり、同月廿九日泉州樫井の會戦は大阪方の全敗となって勇将塙團右衛門直之を失ひ、五月六日には後藤又兵衛基次、薄田隼人兼相等道明寺附近の戦に敗死し、同じ日木村長門守重成も若江に於て壮烈な戦死を遂げ、長曽我部盛親亦八尾に戦って敗走した。七日には大阪城の包圍となり、真田幸村等討って出で、家康の麾下に肉薄せんとしたが、衆寡敵せずして枕を並べて戦死し、大阪城も遂に業火の焼く所となった。翌八日秀頼母子自殺を遂げ、大野治長以下これに殉ずるもの三十餘人、豊臣氏はこゝに滅亡するに至ったのである。

二　樫井合戦のこと

この大阪両度の戦に於て、紀伊國守淺野但馬守長晟（幸長の弟で幸長の死後封をつぐ）は兵を大阪に出して徳川氏の爲に忠勤を抽んでたが、就中夏の陣の初頭に於て樫井の一戦、抜群の手柄を立てたのである。

元和元年四月大阪の風雲漸く急を告ぐるや、徳川氏の命を受けて、家臣淺野左衛門佐氏定（忠知ともあり）、亀田大隅守高綱、上田宗古（宗康ともあり）等と兵五千を率ゐて和泉に入り、同月廿八日先陣は佐野の市場に進み、本陣は信達に着いた。これを知った大阪方は紀州勢を邀撃せんとして、大野主馬助治房、大野道犬、塙團右衛門、岡部則綱、槇島重利等大軍を率ゐて和泉に入り、ゆく〳〵堺、岸和田を焼き、廿九日には

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

その先鋒は貝塚に達した。この時塙團右衛門、岡部則綱の兩將互に先陣を爭ひ、塙團右衛門ぬけ懸して二三百騎の小勢を以て深入して來た。紀州勢の先陣亀田大隅守、淺野左衛門佐等少しく引退き、樫井に於て兩軍先鋒の接戰となつたが、紀州勢の作戰宜しきを得、塙團右衛門戰死を遂げ、先鋒の崩れたつたのを見て、大野治房等は大阪城に引返し、茲に樫井の會戰は紀州勢の大勝に歸した。

この戰に於て、大阪方の猛將塙團右衛門を討取つた殊勲者についてはいろ〳〵の説がある。則ち豊内記には、

「塙段右衛門眞先ニ進、紀州勢八木新左衛門ニ向テ面モフラズ切テカヽル、新左衛門十文字ノ鑓中段ニオツトリ打ツ太刀ヲ引ハヅシ、段右衛門ヲ突タヲシ則首ヲ討取ヌ」

とあり、筆者不明の泉州樫井合戰の事といふものや、大日本人名辞書等にも同様淺野左衛門佐家來八木新左衛門が討取つた事になつてゐるし、長澤聞書といふものには、

「翌年（元和元年）四月のころ大野主馬先手を望み、紀州老たち（泉州信達のこと）といふ所へ深入して、但馬守殿内亀田大隅、上田主水二千に出合負軍、主馬組頭半團右衛門澁谷又兵衛と申者に被討候」

となつてゐる。所が亀田大隅守高綱泉州樫井表合戰覺書には、

「大阪方より武者二騎乘來り候、一騎は赤武者にて二三間もさきにて、一騎は黒武者にて兩人ながら十間計前にて馬よりおり、赤武者は大隅にかゝり、黒武者は上田にかゝり候を、大隅二三間走り出赤武者と相手組、赤武者鎗にて大隅が甲の上を二つ三つ

したゝかに打所を、十文字にて胸板を寄候へば、くる〳〵廻り膝を折候を、又左脇坪を突さうつぶせに伏申所を、亀田家來菅野兵左衛門刀を拔き首を取に懸りければ、臥ながら拔打に兵左衛門が左の足の甲をしたゝかに切る所を、菅野加右衛門彼者の上に打乘り鎗を首筋に突立、兵左衛門に首をとらせ申候（中略）大隅一番に鎗付候武者無比類働故、合戰過候て具足を分取于今所持仕候、此赤武者は塙團右衛門、二番に宗古打取申候は團右衛門家來云々」

とあつて、これが寛永五年正月に亀田大隅守が親ら書殘した實録といはれてゐるものである。

三　紀州一揆の事

豊臣氏最後のあがきともいふべき大阪兩度の役に於て、淺野但馬守の向背は徳川方にとつても豊臣方にとつても、重大の関心をもつてゐたものと見え、大野修理亮治長よりは屢〻使者を送りて味方に引入れんとし、徳川家康よりも板倉伊賀守をしてその出馬を督促せしめた。併し天下の大勢のほゞ決したその頃、結局徳川氏に加擔した事は、淺野氏にとつては賢明な處置であつたといつてよい。大阪方ではかくなる上からは、その後方を攪亂せしめ、あはよくばこれを挾撃せんものと、淺野氏の出兵を機とし、紀州各地の豊臣黨をして所在に蜂起せしめ、一時大さわぎを演ぜしめた。この一揆騒ぎは冬の陣の時にも夏の陣の時にもあつたやうであるが、何れも功を奏せず、間もなく淺野氏の彈壓する所となつた

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

ものらしい。

あいまいなる人名

いろ〳〵の史書を繙いてゆくうちに、人名の混亂してまち〳〵になつてゐる事を知つた。これはその本人の書かれたもの、殘つてゐない限り、最も正確とはいへないけれど、大体に於て正しいと思はれるものによつて、紀州に關係のありさうな人々について書いて見る事にしやう。

×

太閤部下にその人ありと知られた、蜂須賀彦右衛門正勝の事を彦右衛門家政としたものがある。これは恐らく彦右衛門正勝とその子小六家政との通称實名が混同したものであらう。尤も蜂須賀家には通稱を小六でいつたものが數人ある。即ち正勝の父の正利は初代の小六であつて、後に藏人と更め、正勝も幼名を鶴松といひ、次に小六と稱し、また彦右衛門尉と更めたとある。然るに正勝の子の家政は通稱を小六といひ、これは後に改名したやうにもない。實名では正勝は初め利政といつたやうであり、家政には、一成、政家、可慶、政成など澤山の異名があつて、最後に家政と稱したらしい。このやうに名前が更はるとやこしくなるのも當然であるといひたい。

×

蜂須賀彦右衛門正勝と同じく、太田城降參のとき斡旋に力められた人に、前野但馬守長泰といふのがある。この人の通稱を紀伊續風土記古文書の部に、前野將右衛門と前野爲右衛門の二樣に出てゐて、和歌山縣誌その他のものには大抵間違つたまゝを踏襲してゐる。思ふにこれは古文書を寫すとき、將といふ字を草体に書かれてあつたのを、爲と誤寫したものと見るべきで、これは將右衛門といふのが正しいのである。爲右衛門でない證據には、大抵の本には將右衛門とし、稀に勝右衛門と書いたのがあるのでも明かである。

×

田辺へ攻めて來た人に尾藤甚右衛門知宣といふのがある。この人の通稱を湯川記や和歌山縣誌などには久右衛門となつてゐる。これも甚右衛門といふのが正しいのであつて、稀に神右衛門と書いたのはあるが、久右衛門としたのは確かな文献には一つも見當らない。またこの人の實名もあいまいで、知重、光房、知宣などとしたのもある。

×

同じく田辺へ來た一人に青木勘兵衛一矩といふのがあり、湯川彦右衛門覚書には青木民

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

部少輔とし、藤堂家覺書には青木紀伊守とある。所が甫庵太閤記のうちに青木勘兵衛の青木紀伊守と同一人である事は判るが、同じく太閤部下に青木民部少輔一重といふのがあるので、木一重も來てゐるのか、今のところはっきり判らない。序にいふが、太田水責記の追加記事中に、「日高郡入山に青木勘兵衛居」とあり、紀伊續風土記入山城跡の條にも、「村中の山下にあり、方二十五間許、青木勘兵衛由定の居城なりといふ、青木勘兵衛は文祿（永祿の間違なるべし）十一年三月衣奈浦にて三好氏と戰ひて功あり、織田家より日高郡高家莊を與へし事あり（其文書名草郡日方浦の民彦次郎所持す）後豊太閤に仕へて名を紀伊守と改むといふ」と出てゐる。但し眞僞はわからない。

×

天正十三年三月秀吉が紀州征伐の時、泉州千石堀の戰にて筒井順慶勢より火箭を放ち、それが火藥箱に命中爆發して城内に火災起れりと、甫庵太閤記にあって紀伊續風土記などにもその通り載せてあり、その他の本にも筒井順慶がこの戰役に參加したやうに書いたのも見るが、多聞院日記によると、順慶はその前年の天正十二年八月上旬に病死した事になってゐるゆゑ、これはその養嗣子（實は妹の子なり）伊賀守定次の間違ひなる事明かである。尤も火箭を放ったといふのも、川角太閤記には「千石堀をひた〳〵と御取卷被成候、隙すきまなくもみにもみて攻させ給ふ所に、仍柴左衛門佐殿手より、炎は久太郎殿事也、火矢を掛城

焼上り申候、此火矢は左衛門佐殿内吉田孫助と申者にて候、弓上手手聞なる故おもふ所に討付候により如此候、火の手あがるとひとしく攻入申候」とあれば、この方が正しいのかも知れない。

×

雜賀黨の首領に鈴木孫一（鈴木孫一郎ともあり）といふのがある。同黨屈指の傑物であったらしい。この人の實名がまたまち〳〵で、近世日本國民史には「雜賀孫市重朝（初メ鈴木孫三郎ト称ス）」とあり、日本外史關原役の條に「雜賀重次」となし、堺市史には「鈴木持秀」とあって何れが正しいのか判らない。天正五年織田信長紀州征伐の時に降り、同十年雜賀内爭の時には信長の援助を得て土橋一族と爭ってをり、その後土橋平之丞等再起のとき、一時雜賀を去ったらしく、仍柴秀吉紀州征伐のときにも、復雜賀黨首領の一人であり、秀吉に降ったやうに紀伊續風土記などに出てゐるが、仇敵の間柄である土橋平之丞と連合して仍柴勢に當ったといふのは、どうも疑はしく、また正確な記錄には少しもこの人の名が見えない。太田水責記のうちに「三月廿五日ニ太田城へ御使トシテ、鈴木孫市宗内ニテ中村孫平次一氏ヲ遣ル云々」とあるが、中村孫平次は紀南進擊者の一人であって太田責には參加してゐない。增穗の喜々喜といふ本に、

「土橋平之丞年寄郡芳養ニ潜ミ隠居タルガ、同黨ヲ語ラヒ軍ヲ起シ、還リ來テ父ノ仇

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

敵土橋兵大夫ヲ攻殺ス、孫市ハ遁レテ紀州ヲ退キ、柵柴秀吉ニ屬シ武功ヲ立ツ云々。

孫市ハ柵柴家衰テ後ハ關東ニ奉仕、所々勲功アリ御家人トナル云々」

とあるのが、或は事實に近いのでないかと思はれる。關ヶ原役には西軍に屬し、伏見城攻手に加はり城將鳥居彦右衛門元忠の首級をあげて殊勲を樹てたといふ事になつてゐる。併し石田三成が眞田父子に上國の景況を報じた慶長五年八月五日付の文書の中には、

「先書にも申候伏見之儀、内府爲ニ留守居鳥居彦右衛門、松平主殿、内藤豊二右衛門父子、千八百餘騎相籠候、去月十九日より取巻、當月朔日未之刻、無理に四方より乗込候爲、一人も不殘討果候、大將鳥居首は御鐵砲頭鈴木孫三郎討捕候云々」

とある。豊臣家來には別に御弓鉄砲衆に鈴木勝三郎といふのがあるから、この鈴木孫三郎とあるのを鈴木孫一の事とするについては多少の疑点がないでもない。

×

これはずつと後世の人であるが、紀州の本草家小原桃洞の實名は良貴であるのを良直としたもの多く、和歌山縣誌や南葵文庫發行の紀藩士著述目録にもそのやうに誤つてゐる。これは恐らく桃洞小原良貴）の遺稿をその系蘭峡（良直）が桃洞遺筆といふ書名で出版せられた時、その本の扉には小原桃洞先生聞録としてゐるが、本文の初めの編著者名の處に、小原八三郎源良直編とのみあるので、桃洞と良直とは同一人と考へ誤つたものと見える。私が先年紀州植物誌を書いた時、畔田翠山翁は小原良貴翁の門人とすべきところを、小原良直翁の門人と書いてしまひ、飛んでもない間違をしてゐて、今更何とも出來ないのに恐縮してゐる。これは和歌山縣誌の記事を妄信し、桃洞遺筆の序文などをよく調べなかつたから起つた失敗で、少なからず後悔してゐる次第である。

參考史料に就て

私が兩畠山氏、織田氏及び豊臣氏と紀州との關係を調べるにつき、參考資料とした主なる文献類は、大体次のやうなものである。

足利季世記、長祿記、細川勝元記、細川兩家記、拾芥記、長享年後畿内兵乱記、畠山系圖、應仁廣記、應仁後記、續應仁後記、長興宿禰記、信長公記、信長記、石山本願寺日記、石山退去録、細川忠興軍功記、佐久間軍記、多聞院日記、中村一氏記、藤堂家覺書、黒田家譜、菅氏世譜、一柳家記、戸川記、氏鄕記、蜂須賀家記、駒井日記、川角太閤記、甫庵太閤記、豊公紀州御發向記、四國發向記、利家夜話、湯川彦右衛門覺書、紀州武田系圖、中外經緯傳、廢絶録、恩榮録、豊内記、龜田大隅守高綱泉州樫井表合戰覺書、長澤聞書、豊公遺文、本願寺法難史、紀州地士覺、湯川寛記、紀伊續風土記、紀伊名所圖會、日本外史、日本戰史、近世日本國民史、

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

太田水責記、太田城水攻史、増穂の毒々毒、紀伊戰國列傳、田辺沿革小史、堺市史、高野軍記、和歌山縣誌、田邊町誌、新宮市誌等

×

以上列記した中には、實録として信據すべきものもあれば、多少の潤色を加へたと思はれるものや、眞偽相半ばするもの、または稗史に類するものもあるやうである。いろ〳〵の文献を讀んで見て、その記事の眞偽を判別する事はなか〳〵むつかしいものであるが、澤山の史料を調べてゆくうちには、自然にこれを批判する見識、所謂史眼といふものが養はれてゆくものである。ある人々のうちには何でもかでも昔の記録にさへあればそれを事實のやうに考へ、それを資料として郷土の史話を書きあげやうとする事もあるが、これは多くの史料を廣くさぐり、深く研究するといふ事を怠つたもので、私の書いたものゝ中にもこの弊に陥してゐる点が多々ある事と思ふ。

×

舊記の偽作といふ事は、遠い昔から行はれてゐたやうで、所謂系圖がきと稱して祖先の武功を拵へあげ、立派な系圖を作るといふ事の流行した時代もあつたらしい。その舊記の著作者やその書かれた年代のはつきりしてゐるものは信用してよろしいが、さもないものはたとひ舊記と稱しても、無條件に信用するのは、けんのんであるといひたい。所謂古文書として傳へられてゐるものにも可なり贋作があるやうであり、ある土地々々の傳説とか舊跡といはれてゐるものにも後世の偽作が少くないのであるから注意すべきである。

舊記の偽作の古くから行はれたといふ事は、應仁後記といふ本の巻末にもかゝれてゐる。この本は寛永六年の作であつて、細川兩家記や足利季世記などよりも信用程度がうすいやうであるが、その巻末の記事といふのは大体次のやうなものである。

×

寛文頃江州堅田郷の土民に氏郷と名のるものがあつた。幼年より叡山へ遣はし或寺の住僧に仕へしめた。此童性さかしく常に書を讀み、又書を寫す事を好んだ。成長するに應じて記憶強にして辯説人に勝れ、容貌威儀気高くして、起居動作優美であつた。四方を遊歴して謂ふ事には、吾父祖は前江州大守源氏綱より出で、紛れなき佐々木家正統でありといひ、佐々木六角家世系を偽作し、己の名を其末に書載せ、是をいひ立て諸侯に仕へん事を求めたが、思ふやうに成らなかつた。晩年京都僧房に潜居し、奴婢ニ三人を使つて貴人の落ぶれたやうな眞似をしすまし、私に中務大輔と號した云々。氏郷記する所刊本江源武鑑二十巻、大系圖三十巻、倭論語十巻、寫本は淺井日記二巻、関原軍記六巻、勢州軍記二巻等であつて、書中己が先祖と稱する者の事跡を作つて實らしく書載せ、己が偽を蔽隠さんとしたとあつて、當世舊記を偽書する輩氏郷に限るべからず云々と附記してゐる。

×

紀州で書かれた古記録で、その頃の實録と思はれるものは、古文書の外には殆んどないといつてよい。

太田水責に関する古記録は幾通りもあるが、どうも大分文飾を加へられてゐるやうにし

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04064

か思はれない。紀伊續風土記に散見する記事の如きも、大に參考にする事は出來るが、愼重に取捨する必要があると思ふ。紀州地士傳といふのは面白い文献であるけれど、往々間違ひもあつてそのまゝ丸呑みにする事はよくない。湯川寛記といふものは、湯川記に少しく文飾を施しただけのもので、この兩書の記事は虚實相半ばする事既記の通りである。增穗の壽々喜といふものは、最近大阪の圖書館で見たものであつて、私にはその作者も年代も判らぬが、その人物傳などには啓發せらるゝ記事も少くない。只その出典の判らぬものゝあるのは惜しい事である。高野軍記といふ本は明治年代の刊本であつて、これは高野山に傳へられてゐる實錄によつたやうになつてゐるが、戰記もこゝまで來ると、一篇の稗史と見るより外はない。根來燒討太田責細記といふものも同樣であるが、總体昔の戰爭など の記事で、あまりに委しく書き過ぎてあり、あまりに面白く讀まれるものは、餘程創作が加はり、その實が少ないものと見てよい。紀伊戰國列傳や和歌山縣誌其他の地方誌でも、大に參考にはなれど、往々その出典を明記せられてないものあり、その説の眞僞の判別出來ないもの、あるのは遺憾である。

兩畠山氏、織田氏豊臣氏關係

紀州年表

天皇	皇紀	年號	事項
後小松	二〇五九	應永六年	十二月畠山基國、大内義弘を堺に討取、その賞として紀伊國を賜ほる。
後花園	二〇八九	永享元年	畠山持國南朝の殘黨を紀伊に討つ。
	二一二三	寛正四年	畠山義就高野山に入る。〇五月より六月まで、粉河、和歌山附近等にて、政長、義就相爭ふ。義就敗れて熊野北山に落つ。
後土御門	二一二六	文正元年	九月畠山義就熊野を出で、十月入洛。
	二一五〇	延徳二年	七月畠山兩黨紀伊に戰ふ。
	二一五三	明應二年	四月畠山政長河内正覺寺にて敗死、一子尚順紀伊に入る。
			〇七月尚順の黨根來僧徒堺を襲ふ。〇十月畠山義豊兵を紀伊に出す。
	二一五五	同 四年	三月畠山義豊再び紀伊を攻む。
	二一五六	同 五年	十月畠山尚順和泉に侵入せしも克たず。
	二一五七	同 六年	九月畠山尚順和泉に入り、十月畠山義豊を河内に破りて

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04064

二一五九	明應八年	高屋城に入る。
二一六〇	同　九年	正月畠山義豊、畠山尚順と戰ひて敗死す。〇十二月尚順、義豊の子義英と戰ひ敗れて紀伊に退く。
後柏原		
二一七三	永正十年	八月畠山尚順、根來衆徒と和泉に出陣。九月義英を高屋に攻め大敗して紀伊に退く。
二一七八	同　十五年	九月畠山義英、畠山尚順と河内に戰ひ、敗れて高野山に遁る。
二一七九	同　十六年	此頃畠山尚順家督をその子植長に讓りて、紀伊廣に退隱す。
後奈良		
二一九二	天文元年	此頃湯川直光、畠山尚順に叛き鎭壓せらる。
二一九四	同　三年	三月野辺六郎左衛門、畠山尚順に叛く。湯川直光再起。
二二〇二	同　十一年	尚順淡路に落ち尋いで病死す。〇七月植長紀伊に入り野辺、湯川を討たんとして成らず、根來に隱る。〇畠山の家臣等植長の弟長經を立て、高屋城主とす。
二二一八	永祿元年	三月植長迎へられて高屋城に入る。
正親町		十一月畠山高政高屋城を出でゝ堺に入り、ついで紀伊に奔る。

二二一九	同　二年	八月湯川直光、玉置與九郎等畠山高政を擁して堺に入りついで高屋城に入る。〇湯川直光功により河内守護代となる。
二二二〇	同　三年	五月湯川直光を紀伊に還し、再び安見直政を河内守護代となす。
二二二一	同　四年	七月畠山高政、根來衆徒、安見直政等一味して和泉に入り、十二月河内に攻め入る。
二二二二	同　五年	三月三好實休、畠山湯川の聯合軍と和泉久米田に戰ひて敗死す。ついで畠山勢飯盛城を攻む。〇五月畠山湯川勢、三好勢と河内教興寺に戰ひて大敗し、湯川直光等戰死す。
二二二三	同　六年	十月根來の代表者堺に來りて三好氏と和す。
二二二六	同　九年	二月畠山高政、根來衆徒等松永久秀と連合して三好三人衆と戰ふ、三月敗れて高政堺に遁入す。
二二二八	同　十一年	十月畠山高政、松永久秀、三好義繼等織田信長に款を納る。高政再び高屋城主となる。
二二二九	同　十二年	畠山高政、家老遊佐、安見に逐はれて紀伊に退き、高政の弟昭高跡をつぐ。
二二三〇	元龜元年	九月攝津野田福島の役あり、根來衆、湯川、玉置等は織

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

二二三二	天正元年	田氏に嫁し、鈴木孫一は三好氏を援く。
二二三六	同　四年	十一月足利義昭紀伊に入りて同志を募る。
二二三七	同　五年	六月畠山貞政、雑賀根来の徒に擁せられて本願寺に應ず。
二二三八	同　六年	二月雑賀三緘の者織田信長に款を納る。○織田信長雑賀征伐の軍を出す。○三月鈴木孫一等降る。
		五月織田信長本願寺を攻む、本願寺雑賀黨の來援を求む。
		○六月雑賀、淡ノ輪の徒九鬼嘉隆の水軍を紀伊水道に要撃す。
二二四〇	同　八年	四月本願寺顯如紀伊に移る。○八月佐久間信盛父子織田信長の不興を蒙りて紀伊寒川に蟄居す。
二二四一	同　九年	織田信長と高野山との紛爭つづく。○八月佐久間信盛十津川にて病死す。
二二四二	同　十年	正月雑賀黨内爭あり、鈴木孫一等土橋若大夫を殺す。信長兵を出して鈴木孫一等を援く。○佐久間正勝赦免となりて紀伊を出づ。
		三月紀州勢和泉に侵入し堺、岸和田を襲ふ。
		三月卅柴秀吉紀州を伐つ。○四月太田城降伏。○七月紀南平定。○紀伊、和泉を大和大納言秀長に加賜せらる。
二二四四	同　十二年	三月紀州勢和泉に侵入し堺、岸和田を襲ふ。
二二四五	同　十三年	三月紀州勢和泉に侵入し堺、岸和田を襲ふ。

二二五〇	後陽成　同　十八年	桑山重晴和歌山城代となり、杉若越後守田辺城代となる。
二二五二	文祿元年	三月朝鮮の役あり、桑山一晴、杉若越後守、堀内安房守等水師を率ゐて渡海す。
二二五四	同　三年	三月豊臣秀吉高野山登御、先妣の法會を修む。
二二五五	同　四年	三月豊臣秀次高野山に幽せられ、ついで死を賜ふ。
二二五八	慶長三年	九月日高郡山路地方に一揆起る。
二二六〇	同　五年	九月關ヶ原の役あり、桑山一晴東軍に黨し、杉若越後守、堀内安房守等西軍に黨す。○十一月浅野幸長紀伊一國に封ぜられ、浅野左衛門佐を田辺城代に浅野右近大夫を新宮城代となす。○桑山一晴は大和布施へ移封。杉若越後守と堀内安房守は除封となる。
二二七四	後水尾　同　十九年	十一月大阪冬の陣起り、浅野但馬守徳川氏に加擔して兵を大阪に出す。
二二七五	元和元年	四月大阪夏の陣起り、泉州樫井合戦に紀州勢大勝す。
		○冬夏兩度の戦中紀伊に一揆騒ぎあり。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

昭和十四年六月五日印刷
昭和十四年六月十日發行

百部限定版
非賣品

編著兼發行者　宇井縫藏
大阪府豐能郡南豐島村大字原田九四六番地

印刷所　プリント社
大阪市天王寺區勝山通二丁目三四番地
電話天王寺一三七一番

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064

祝開
落成校

市部京
校學小常學鳳祥四第

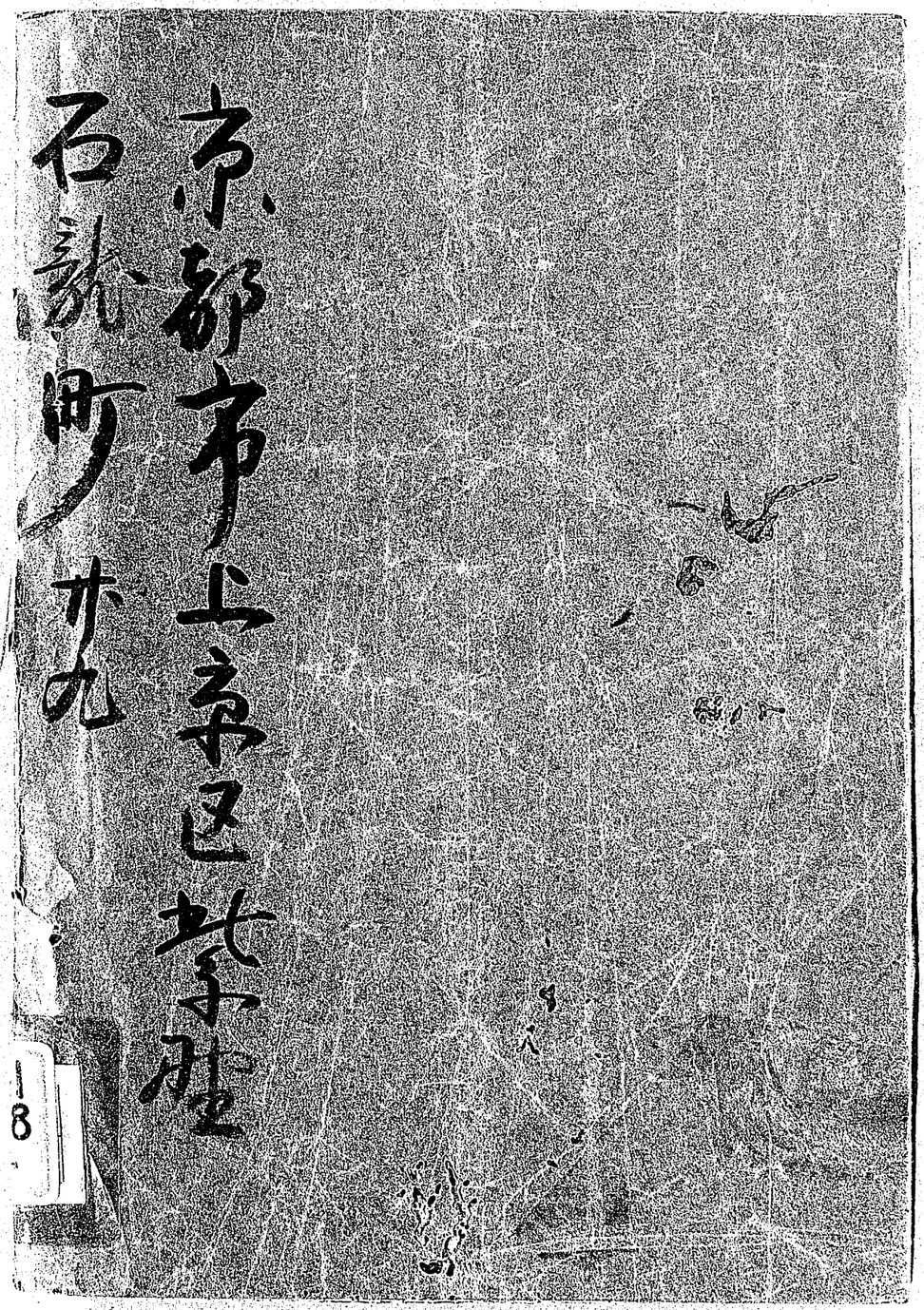
和歌山縣立[illegible]座高等學校

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号 04064

祝開
落成校

市都京
校學小常尋鳳待四第

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 04064



県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04064